

第Ⅱ部

アイデンティティーの史的展開

第4章

ルワンダのツチとフツ

——植民地化以前の集団形成についての覚書——

はじめに

1994年にルワンダで起こった虐殺はきわめて衝撃的であった。殺戮の規模が与えた衝撃はもちろん大きい。人口が700万人程度の国で100万といわれる人々が殺害されたのであり、第二次世界大戦における日本の犠牲者数が300万人あまりであったことを考えれば、その犠牲がいかに甚大なものかがわかる。もう一つの衝撃は、「部族対立」の形をとってこの虐殺がなされたことである。犠牲者のかなりの部分はツチであり⁽¹⁾、彼らはツチであるという理由で殺害された。しばしば「熱帯のナチズム」(Chrétien [1995], Chrétien dir. [1995])と形容される94年の大虐殺においては⁽²⁾、ツチに対する選別的な殺戮が繰り返し広げられたのである。虐殺の首謀者たちは現在、ジェノサイドの嫌疑によりルワンダ内外の法廷で裁きを受けている⁽³⁾。現代アフリカの紛争を語る際の常套句と化している「部族対立」が究極的な形で現れたとみえるところに、ルワンダの虐殺が世界に大きな衝撃を与えたもう一つの理由がある。世界は、ルワンダの虐殺に現代アフリカの紛争の象徴をみたのである。

なぜツチとフツとの間で虐殺が生じる事態に立ち至ったのか。今日までルワンダの紛争に関する多くの研究がなされ、その要因と起源については一定の合意が形成されつつある⁽⁴⁾。それはまず第1に、1994年の虐殺が突発的なものではなく、59年、63年、73年など独立前後から繰り返されてきたツチに

対する迫害、虐殺の延長線上に位置づけられることである⁵⁾。いずれの事件においても数千～数万人のツチが殺害され、より多くの人々が難民化した。こうした事件以外にも、独立以降のルワンダではツチの迫害が恒常的に行われ、国家権力による煽動が迫害と虐殺の発生に大きな役割を果たしてきた。

ルワンダ史においてツチとフツとが集団的な枠組みで暴力的対立に至ったのは1959年が最初である。いったん暴力的対立が現出すると、それは時とともに規模を拡大しながら繰り返された。59年の事件はその意味でルワンダ史上画期をなすものであるが、この暴力的対立の形成にあたっては植民地期の諸政策と社会経済的変容が重要な役割を果たした。第2の合意点はここにある。ルワンダを最初に植民地化したドイツも、その後国際連盟、国際連合から統治を任されたベルギーも、当時のヨーロッパにおける一般的なアフリカ観であるハム理論（後述）の影響を強く受け、「コーカソイドのツチがネグロイドのフツを支配する」ものとしてルワンダの社会構造を捉えて、植民地統治体制をつくりあげた。とくにベルギー統治期には、曖昧だったツチとフツとの区別を明確化して身分証明書に書き込み、そのうえで間接統治を担う行政の要職をツチに独占させる政策がとられた。植民地権力によって制度化された政治的不平等はフツに分類された人々の不満を醸成した。さらに、植民地期の人口増や徴税強化のため、農民の生活は一般的に悪化した。こうして蓄積された不満が植民地期末期の政治変動のなかで暴力的対立へと転化していくのである。

ツチとフツとの集団的、暴力的な対立が植民地期につくられ、独立以降の政権によって増幅されたという見解は、多くの研究者に共有されている。したがって、彼らの研究対象も植民地化以降の時期に集中してきた。しかしながら、この時期だけに着目しては解決できない問いが存在する。それは、ルワンダ史においてツチ、フツ（そしてトゥワ）という集団をどのように捉えるべきなのか、植民地権力の影響が及ぶ以前の彼らの関係はいかなるものであったのかという問題である。今日のルワンダ紛争を捉えるうえで、この問題は重要である。暴力的対立の形成にあたって植民地期の社会変容が決定

的であるとしても、ツチにせよフツにせよ植民地当局によって発明された概念ではない。だとすれば、植民地期以前の社会関係を踏まえなければ、植民地期の変化について評価することはできないはずである。

植民地期ルワンダの変容とツチ、フツ間の対立形成については研究者の間で概ね意見が一致している反面、植民地期以前のツチ、フツ関係をいかに捉えるかという点では必ずしも意見の一致をみていない。例えば、最近ルワンダ通史を著したリュガン (B. Lugan) は、そのなかで著名なルワンダ・ブルンジ歴史研究者であるクレティアン (J. -P. Chrétien) に厳しい批判を加えている (Lugan [1997: 547-557])。クレティアンは植民地化以前のツチ、フツ関係は経済的なものにすぎなかったと主張するが、これは全くの誤りだとリュガンは批判する。両者の関係は植民地化以前にあっても「人種的」(racial) なものであって、すべてを植民地化のせいにするのは見当違いだと彼は言うのである。クレティアンに対するリュガンのやや感情的な非難のすべてが当を得ているとは思えないし、ツチ、フツ関係をことごとく「人種」に還元する彼の主張には批判されるべき点が多々あるが、植民地化以前のツチ、フツ関係について「人種的」側面を除外してしまうこともまた妥当ではない⁽⁶⁾。

ツチとは何か、フツとは何かという問題は、虐殺に注目が集まる以前から、ルワンダ史研究の中心的な課題であった⁽⁷⁾。周知のように、ツチ、フツ、トゥワというルワンダの三つの集団は、同じバンツール系言語を話し、同一領域内に混じり合って居住するが、生業の差異と身体的特徴とを主たる根拠として分別されることが普通である。そしてそれらには、人種、カースト、社会階級、あるいはエトニー (ethnie) などさまざまな呼称が当てられ、その集団の性格と集団間関係に関してさまざまな議論が戦わされてきたのである⁽⁸⁾。

本章の目的は、ルワンダ史、大湖地域史研究のこれまでの成果を検討しつつ、ツチ、フツという集団の形成過程や特質について、植民地化以前のルワンダ社会のダイナミズムのなかで考察することにある⁽⁹⁾。ルワンダ社会における圧倒的な重要性を考慮して、本章ではツチとフツについてのみ扱い、

トゥワについては別の機会に譲ることとする⁹⁰。最初に断っておけば、この問題には正解が与えられていないし、筆者自身が新たな史料によってそれを解明したわけでもない。以下で紹介するこれまでの議論も、本章の結論も、ある意味ですべて仮説にすぎない。しかし、これまでの研究蓄積に照らして、少なくともこの仮説は誤りである、あるいは重大な欠陥があるという指摘、あるいはこの仮説はかなり精度が高いという指摘を行うことは可能である。ルワンダ史についての先行研究がほとんど存在しない日本においては、今後の研究に向けた土台づくりという意味で、こうした試みも一定の意義と必要性をもつと考える。

第1節 起源

ルワンダの歴史について従来流通していた理解とは、概ね次のようなものであった。すなわち、ルワンダには最初に狩猟採集民のトゥワが居住しており、そこに農耕民のフツが到来し、その後北方から牧畜民のツチがやってきて両者を征服し王国を築いた、というものである (Maquet [1961])。今日においても、フツとツチはその起源を異にするという理解が一般的である (Dorsey [1994])。両者の起源について、これまでどのような議論がなされてきたのであろうか。本節では、ルワンダ王国成立以前の大湖地域の住民についての議論を整理していきたい。結論的にいえば、フツとツチの起源をそれぞれ別の時代に生じた人口移動に求める説は支持を失いつつある。従来の説では、フツの起源は「バンツー拡大」(Bantu Expansion) と呼ばれるバンツー系言語の普及過程に、ツチの起源は紀元後10~11世紀に生じたとされる北方の牧畜民の南下に求められてきた。いずれの説についても再検討が進み、異なる集団の移動と征服とによってルワンダ史を理解しようとする歴史観に対して根本的な疑問が呈されている。

1. ツチ——北方起源説への疑問

ツチが北方から到来したとする諸説では、その時期は概ね紀元10~13世紀頃と主張される。まず、この「紀元後第二千年紀⁹⁴北方牧畜民南下説」について検討しよう。この説は口頭伝承で語られ、また考古学的な史料もそれを裏付けているとされた。ルワンダの口頭伝承はツチが北方から到来したと伝えている (Maquet [1961:11], d'Hertefeldt [1962:17])。また、考古学的史料としては、それまでこの地域で共通して用いられ、バンツー系諸語を話す集団が製作したと考えられているウレウエ (Urewe) 土器群が、紀元後第二千年紀に入って、大湖地域周辺の広い範囲で急速に他のタイプの土器 (縄で作られた施文具で回転施文されたもの) に取って代わられたことが指摘される (フィリップソン[1987:266-267], Oliver [1977])。新たなタイプの土器はそれ以前のものよりも技術的に劣っており、これが北方地域の特徴を有することから、この土器に転換する紀元後第二千年紀の初めにその製作者が北方から大湖地域を征服し、彼らの技術を広めたと考えられた。

大湖地域の諸王国における支配階層が北方起源だと最初に主張した出版物は、スピーク (John H. Speke) のナイル川源流探検記であった (Prunier [1995:7], Schoenbrun [1993:163])。スピークは、大湖地域の支配層「ワフマ」⁹⁵は「ガラ」(Galla) あるいは「アビシニア人」であり、彼らはこの地域に侵入してきた「外国人」だと述べ、その根拠として「ワフマの身体的特徴」をあげる (Speke [1864:246-247])。すなわち、大湖地域諸王国の支配層はエチオピアで一般的な長身痩躯の人々であるから、これらの王国は彼ら「ワフマ」のエチオピアからの侵入によって築かれたとスピークは考えたわけである⁹⁶。

スピークが当時のヨーロッパ人の人種観である「ハム仮説」にとらわれていたことは明らかである。「ハム仮説」では、あらゆるアフリカの文明はコーカソイドの血が混じったハムによって伝播されたと考えられ、その祖地

はエチオピアだとされた。とりわけ初期の段階で「北方起源説」が受け入れられる際にこのイデオロギーが影響していたことは指摘しておくべきであろう。「ワフマの身体的特徴」をもつツチはハムであり、北方からこの地に侵入してきたとの説が当然視されたのである。「ハム仮説」については1960年代以降そのヨーロッパ中心主義的イデオロギー性が暴露され科学的根拠を失ったが (Sanders [1969]), 植民地期には教会関係者や行政官を通じて広く流布され、アフリカ人に対してもこのような歴史教育がなされた (Chrétien [1985])⁹⁴⁾。

「ハム仮説」ほど単純でなくとも、身体的特徴からフツを「バンツー」、ツチを「ナイロート」だとみなし、紀元第二千年紀に生じたとされるナイロート系集団の拡大過程にツチの起源を求める考え方はごく一般的であった (例えば Murdock [1959: 350])。「ナイロートによるバンツウの征服」を通じて封建国家が形成されたとする大湖地方諸王国の歴史が、世界的にも定説をなしていたのである。

この「紀元後第二千年紀北方牧畜民南下説」に対して疑問を呈する向きはこれまでもあったが⁹⁵⁾、近年になって比較歴史言語学の手法を用いた研究者がかなり根本的な批判を提起している。語彙データの検討から、大湖地域の北方に居住していたナイル・サハラ語族東・中央スーダン諸語の話者およびアフロ・アジア語族南クシ諸語の話者が、この地域でニジェール・コルドファン語族バンツー系諸語の話者に文化的影響を与えたのはもっと早い時期であったと推測され⁹⁶⁾、紀元後第二千年紀初期に彼らが南下したという言語学的証拠は得られないことがわかったのである。

大湖地域西部にはかつて中央スーダン系諸語、東スーダン系諸語、南クシ系諸語およびバンツー系諸語の話者も居住していたが、現在この地域はすべてバンツー系諸語の話者で占められている。大湖地域で現在話されるバンツー系諸語が上記の諸語から借用した語彙データを手がかりにして、ショーンブラン (D. L. Schoenbrun) は次のようにこれら集団間の歴史的関係を再構成している。

紀元前1000~500年頃には、中央スーダン系、東スーダン系、南クシ系、そして大湖バンツー系諸語の話者が大湖地域に居住し、それぞれ特徴ある生業を維持していた。中央スーダン系、東スーダン系諸語の話者はソルガムとトウジンビエを中心とする穀物栽培と牧畜を組み合わせた生業構造をもち、南クシ系諸語の話者はそれに比べれば牛を中心とした牧畜により依存していた⁶⁷⁾。大湖バンツー系諸語の話者はヤムなど根茎作物を中心とする食糧生産システムをもっていたほか⁶⁸⁾、漁労を行うとともに小家畜も飼育していた。これらの集団は大湖地域で隣接して暮らし、生産物の交換や通婚など密接な接触を保った。紀元前500年以降、大湖バンツー系諸語の話者は他の言語集団の農業技術（とくに穀類生産技術）を取り入れ、統合的な食糧生産システムを確立した。また、ほぼ同じ時期に彼らは鉄器生産技術も身につけた。折衷的な食糧生産システムと鉄器技術は相互に発展を促し、大湖バンツー系諸語の話者はそれまでの森林縁辺湿潤地域から大湖地域全域に活動の場を広げた。この環境制約の打破によって、紀元後500年頃までには大湖バンツー系諸語の話者が有する言語、文化がこの地域で支配的になった。

大湖バンツー系諸語の話者は、紀元転換期頃には牛の飼育とその生産物の利用に関する知識をもっていた。この時期彼らは食糧生産システムに大家畜を統合し、牛の肉や皮のみならず、ミルク、血、糞などを利用していた。それらは自家消費用としても、クシ系、スーダン系住民との交換用としても利用された。ただし、この時期に利用された牛は現在大湖地域で一般的にみられる長角のサンガ牛ではなく（Nkurikiyimfura [1994]）、それらの牛が社会的、経済的に特別な意味をもっていたわけではなかった。大湖地域西部で大家畜が著しい社会経済的重要性を帯びるのは、紀元後第二千年紀に入って以降のことである（Schoenbrun [1993]）。

「紀元後第二千年紀北方牧畜民南下説」が依拠する論拠は、「ハム仮説」を別にすれば、身体的特徴、口頭伝承そして考古学的史料であることは先に述べた。これら論拠の妥当性はどのように評価できるだろうか。まず、身体的特徴については、ツチと呼ばれる人々に「ナイロート」的な身体特徴をも

つ者が、フツに「バンツー」的な特徴をもつ者が存在することは確かであろう。スピークの記事にもあるが、今世紀初頭のルワンダ王族を撮した写真を見ても「長身瘦躯」の体型をもつ人々が多い⁹⁹。ただし、だからといって、身体特徴によってツチとフツとを集団として完全に区別することは不可能であり、だからこそ1994年の虐殺時に所属する「部族」名が記載された身分証明書が重要な役割を果たしたのである。また、体型の差異は両者の祖先が異なる可能性があるという以上のことを意味しない。ツチという集団が移住してきたことを証明するためには、それだけでは根拠として薄弱である。

口頭伝承についても、客観的な史料というよりも一つの言説として捉えるべきであろう。最近では、ヨーロッパ人の関心に辻褃を合わせる形で口頭伝承が語られた可能性、植民地期に「伝統王国」の正統性を確保するために王朝史が改変された可能性も指摘されている (Sutton [1993], Newbury, D. [1994])。現代において利用しうる「現地史料」が、たとえそれがアフリカ人自身の語る声であったとしても、すでに何らかの形でヨーロッパ思想の洗礼を浴びたものであることに、われわれは自覚的であるべきだろう。

他方、考古学的調査が明らかにした紀元後第二千年紀に入ってから土器の変化についてはどうだろうか。かなり広い範囲で人々が利用する土器が変化したという事実 (これは事実とっていいだろう) は、その時期にこの地域でかなり激しい社会経済的变化があったことを示している。従来それは征服民到来という文脈で理解されたのであるが、近年は征服民と切り離して社会経済的变化を考える論調が強まっている (Schoenbrun [1993], [1998], Sutton [1993], Feierman [1995])。それ以前の時代に比べて土器の質が落ちたのは、北方文化の影響というよりも土器 (壺) の使用が広がって大量生産が行われるようになったためだと主張され (Schoenbrun [1998:36])、土器の変化をそのまま牧畜民侵入に結びつける論調は薄れている。

それでは、この紀元後第二千年紀初めの著しい社会経済的变化とは何であり、それは何によって引き起こされたのだろうか。バンツー系諸語話者が発展させた統合的混合農業がその誘因となったことは、おそらく間違いない。

近隣の言語グループから穀類作物や大家畜を取り入れたバンツェ諸語話者の農業システムは、環境制約を打破して農業発展と人口増大をもたらしたが、それは同時に農業適地へのアクセスをめぐる競争も強めた。彼らがもともと居住していた森林縁辺の湿潤地帯はツェツェバエやダニが生息しているため牛の飼育には不適であったが、農耕によって森林が草地に変わるとそれらの害虫が減少し、牧畜が十分可能となった⁹⁹。そうした土地の利用をめぐる住民間の競争が激化したのである。

こうした状況のなか、紀元後第二千年紀に入る頃、農業に重きをおく集団と牧畜に重きをおく集団という二つの異なった生業構造をもつ集団が現れてくる。この現象が内発的なものなのか、外部からの影響を受けたのかについては未だ議論が尽くされていない。例えば牧畜に重きをおく集団の出現に関する説明としては、農業発展によって形成された湿潤地帯の草地が牧畜に適した土地となり、そこにもともと牧畜中心の生業を営んでいたスーダン系、クシ系諸言語話者の子孫が集中的に流入した (Schoenbrun [1998:76])、あるいは紀元後1000年頃に長角のサンガ牛が大湖地域に導入され大規模な畜産が開始された (Sutton [1993:59])、といった説がある。

上記の議論を総合すれば、紀元後第二千年紀初頭の社会変化とは、良質の土地をめぐる競争の激化を背景にした生業の分離ということになるだろう。この考え方については未だ十分に議論されていない部分もあるが、従来の北方集団征服説が論拠を失う一方で、より内発的、自律的な地域社会の変容が重視されていることは確かである。

2. フツ——「バンツェ拡大」の再検討

ルワンダ史における「ツチの出現」に関して問題となるのは、ここまでみてきた紀元後第二千年紀初頭の変動であるが、次に「フツの出現」に関連して「バンツェ拡大」に関する近年の議論を整理しておきたい。

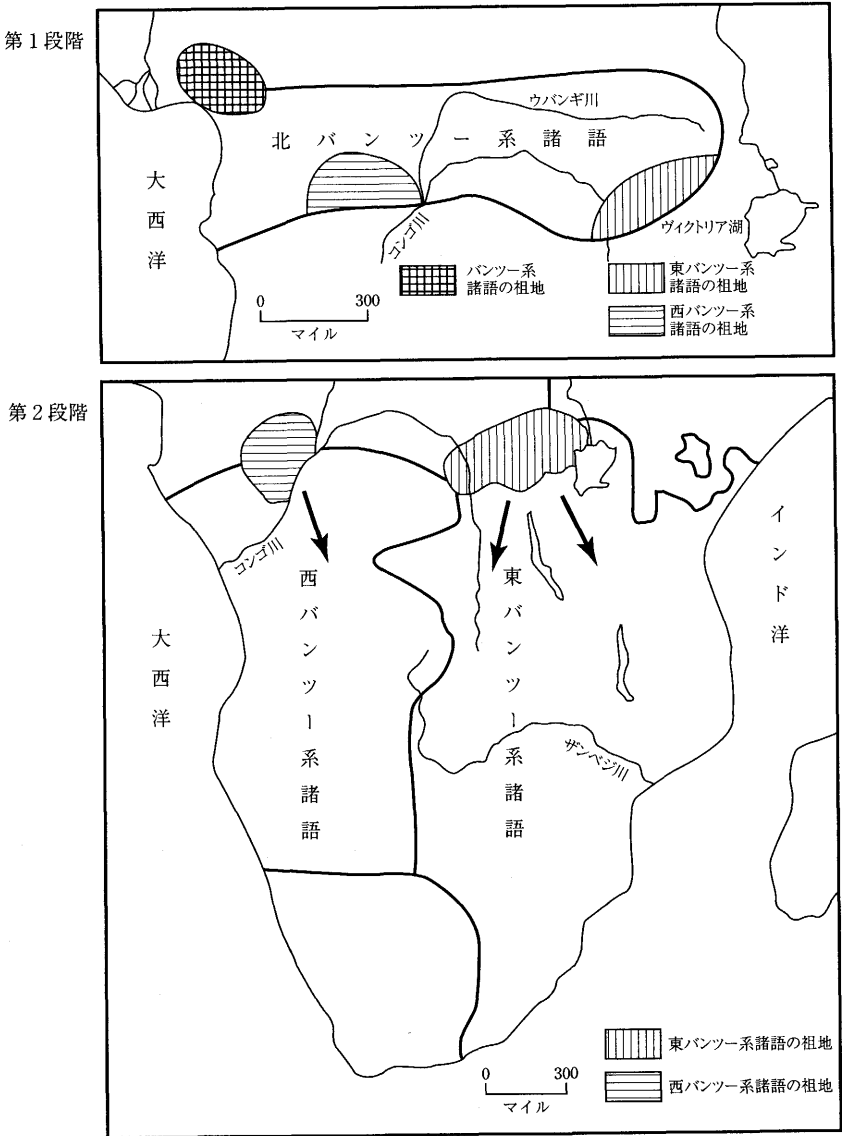
赤道以南のほぼ全域を占めるバンツェ系諸語については、グリーンバーク

(Greenberg)の言語学的研究にもとづいて、現カメルーン、ナイジェリアの中部国境付近がその祖地とされ、その話者の急速な移動を通じてそこから中部、東部、南部アフリカに拡大したとされてきた。こうした移動説は、考古学的研究からも、東南部アフリカで紀元転換期を挟んで前後500~600年の間に広範囲できわめて類似した文化複合(シフンバーゼ複合)が出現することを根拠に支持された(フィリップソン [1987:231-232])。「モハメッド後のアラブ」(Murdock [1959:276])に匹敵する「爆発的拡大」は、湿潤気候に適したヤムなど根茎作物の東南アジアからの導入(Murdock [1959:273])や鉄器製造技術の習得(Oliver [1966:367])といった要因によって可能になったと理解されてきた。

バンツー系諸語の祖地については従来の説が有力だが、拡大過程についてはさまざまな議論がある。とりわけ「モハメッド後のアラブ」という比喩に暗示されているような、単一集団による急速な拡張(征服)過程としてバンツー拡大を捉える説は近年退けられている。代表的な見解として、最近の歴史比較言語学のデータにもとづき、より漸次的、多元的な「バンツー拡大」仮説を提示しているヴァンシナをとりあげよう(Vansina [1995a], [1995b])。彼は、バンツー諸語の祖地については従来の説で正しいが、拡大過程に関しては少なくとも北部、西部、東部のバンツー諸語に分けて考える必要があるという(図1参照)。紀元前第二千年紀に拡大を開始したバンツー系言語は、祖地から熱帯雨林北辺を東方に進んでヴィクトリア湖付近に至る。この範囲の諸語が北部バンツー諸語である。北部バンツー諸語が広まった地域のなかで、ガボン東部からコンゴ北部にかけてとウガンダ西部がそれぞれ西部バンツー諸語、東部バンツー諸語の祖地になり、そこから南方へとそれぞれの言語・文化が拡散していった。この3分類のなかでも複数の言語系統が認められており、「バンツー拡大」は、単一の祖地からの拡散としてよりも、いくつものバンツー系言語がいくつもの地域で同時並行的に拡散する過程と捉えるべきである。

したがって、人口移動が言語拡散に重要な役割を果たしたことはおそらく

図1 バンツール系諸語の拡大過程



(出所) Vansina [1995b: 17].

正しいとしても、そのみに「バンツ－拡大」を還元する必要はない。池に石を投げ入れれば水の輪が広がっていくが、その現象は水の移動を示してはいない。水は同じ場所で上下に揺れているだけである。言語や文化の拡散は、ある社会の変容を示しても、必ずしも人口移動を示すものではない (Vansina [1995a: 189])。ヴァンシナは、バンツ－諸語が急速に拡散した要因として、人口移動や技術的優位性という従来の説を相対化する一方、次のような仮説を提示している。農耕を生業とするバンツ－諸語話者の社会組織は、狩猟採集を生業とする先住民のそれに比べて大きい。彼らのムラは狩猟採集民の集住地よりも大きく、定着性も強かったのである。そのためバンツ－系言語話者の居住地は、周辺の狩猟採集民も含めた地域住民が交流する、いわば当該地域の社会経済的結節点になりやすかった。これによって、彼らの言葉であるバンツ－系諸語はその地域のリングフランカとしての地位を獲得し、結果的に急速な伝播につながったというものである (Vansina [1995a: 192])。

ヴァンシナの仮説についても今後さらなる検討が必要であろうが、単一集団による急速な人口移動 (あるいは征服) の過程として「バンツ－拡大」を理解すべきでないという主張は説得的である。バンツ－系諸語の拡大は、単一の集団がごく短期間に一定の領域に移住した結果というよりも、類似した言語文化をもつ複数の集団が比較的長期間のうちに徐々に出現することによって生じたと考えるべきであろう。「ツチは14世紀以前にルワンダに到着した」, 「(フツは) 第一千年紀にルワンダに到着した」(Dorsey [1994: 386, 251]) といった説明は、その時代的整合性を云々する以前に、ツチやフツを当初から単一の集団であったと捉えている点で明らかに妥当性を欠くと考えられる。

第2節 政治的共同体の形成と発展

ルワンダにおけるツチとフツの関係を考えるうえで重要なのは、歴史的に

形成された様々な政治的共同体に関する検討である。本節では、ルワンダにおいて、「クラン」²⁹やリネージといった社会集団、そして国家が生成・発展する過程について述べる。こうした政治的共同体³⁰の生成・発展過程をあとづけることは、たとえそれがツチ・フツ関係を直接に扱っていなくとも、両者の関係を考察するうえで必要不可欠である。政治的共同体の性格や特質は、当然ながらそこに含まれる集団間の関係を規定するからである。本節で歴史過程の側面を中心的に検討したうえで、次節において制度や構造の面から集団間関係を捉えることとする。

1. 社会集団

大湖地域における社会集団の誕生については、Schoenbrun [1998]が興味深い仮説を提示している。歴史言語学的な分析によれば、農業適地へのアクセスをめぐる競争が激しくなりつつあった紀元後第一千年紀末、大湖地域西部の住民の間に集団に関する概念が現れる。集団概念は、最初は共通性をもつ人々のまとまりといった程度の緩やかなものにすぎなかったが、次第に土地に対する権利に関連して排他性を増すようになる。その際に原則となるのが父系出自原理であった。ある土地を父系出自集団が独占的に利用する権利をもつという原則の適用によって、土地へのアクセスが制限されるようになったのである。一連の変化は、父系イデオロギーによる社会組織の形成、再編過程であった。

ここで重要なのは、現代ニャルワンダ語³¹で *ubwooko* (pl. *amooko*) と呼ばれる概念である。これは通常「クラン」と訳される。この「クラン」には例外なくツチ、フツ、トゥワという三つの集団が含まれ³²、リネージ *umuryaango* (pl. *imiryaango*) が厳密な外婚制をとるのに対して「クラン」はそうではない (d'Hertefelt[1971:6])。現代ルワンダでは、各人がどの「クラン」に属するというアイデンティティーをもつとはいえ、「クラン」が重要な政治的機能を担うわけではない。それを特徴づけるのは、多くがトーテムをもつこと

程度である²⁹⁸。ルワンダの「クラン」の起源をめぐってはこれまで多くの議論が戦わされてきたが²⁹⁹、ショーンブランはこれを大湖地域西部に現れた最初の集団概念として理解すべきだと主張する (Schoenbrun [1998: 134-135])。ルワンダの *ubwooko* は、リネージの延長線上にある通常のクランが歴史とともにその機能を喪失したものというよりも、そもそも集団のアイデンティティー確立の手段の一つとして現れた概念だと解釈できる。それは、原始的な集団概念であり、当初から非常に緩やかなものだったのである³⁰⁰。

その緩やかな集団のなかに、より排他的な集団が誕生する。父系リネージである。ここでは成員は父系制という厳密な原理で選別される。農業適地の相対的な不足を背景に、土地への権利主体としての父系リネージが紀元後第二千年紀の初めに出現するのである。成員への土地分配や特定領域の防衛といった政治機能を担うリネージは、国家形成の第一段階とみなしてよいであろう。ルワンダ領域内にはその後多くの「フツの小王国」(*principauté hutu*) が成立するが³⁰¹、それらの王国では父系出自集団が基盤となっていた。

リネージや、より小さな血縁集団の単位である *inzu* (pl. *amazu*)³⁰² は、現代のルワンダでも一定の政治的機能を果たしている。例えば、リネージの土地保有権問題は現代ルワンダ政治の重要な争点となった。次節で述べるように、ルワンダの土地制度は19世紀頃から王宮による支配強化にともなって複雑化していくが、北部や西部など王宮の権威から自律的であった地域では、リネージが土地保有権をもつ構造が残存していた。独立後、政府がこの制度を廃止しようとしたとき北部出身者は猛烈に抵抗し、それを存続させることに成功した (Lemarchand [1970: 230-233], Reyntjens [1985: 487-494])。1994年に暗殺されたハビヤリマナ大統領の政権末期には、*akazu* (小さな家) と呼ばれる大統領夫妻の近親者が権力を独占したが³⁰³、とくにアガト夫人の親族が多かった。ハビヤリマナの出身地は北西部ギセニイだが、彼の出身リネージが土地保有権をもたない「クライアント」*ubugererwa* であったのに対し、妻のリネージは土地保有権をもつ「パトロン」*ubukonde* であり³⁰⁴、彼女の親族の発言力の方が強かったのである (Reyntjens [1994b: 270])。

2. ルワンダ王国の誕生と拡大

ルワンダにおける政治的共同体の構造を考えると、とくに問題になるのは、農耕民と牧畜民とのヒエラルキーである。大湖地域諸王国の特質は、何よりもまず、少数の牧畜民（ツチ、ヒマ）が多数の農耕民（フツ、イル）を支配する政治社会構造にあると、これまで繰り返し指摘されてきた（マケ [1973]）。前節で、紀元後第一千年紀末から第二千年紀初頭にかけて、牧畜に生業の重きをおく集団と農耕に重きをおく集団とが徐々に現れてきたことを述べたが、ルワンダ王国成立以前の時期における両者の関係はどのようなものだったのだろうか。そして、ツチによるフツの征服過程として理解されることの多いルワンダ王国の拡大過程とは、実際にどのようなものであったのだろうか。

Sutton [1993]は、ウガンダ南西部に位置する遺跡の考古学的調査にもとづいて、紀元後第二千年紀前半の生活を考察している。紀元後第二千年紀初めの人口集中地とみられるンツシ (Ntusi) 遺跡は、ソルガムを主食とする農業コミュニティであったと考えられるが、そこでは大量の牛の骨も発掘されている。ンツシは農業に重点をおくコミュニティであったとはいえ、自身で牛を飼育し、牧畜により生業の重心をおく周辺の集団との間で生産物（農産物と畜産物）の交換を行っていた (Sutton [1993: 52-57])。サットンはこのようにした集団間の関係を（現代ウガンダ西部の牧畜民・農耕民を示す）「ヒマール」という二分法で理解することはできないと主張する (Sutton [1993: 56])。両者間の支配・非支配関係を示す証拠はないし、生業の差異もそれほど大きくはなかったからである。

牧畜民による農耕民の征服という事態は、国家の成立と拡大のなかで考慮すべきであろう。ルワンダの王はニギニャ (Nyiginya) リネージから選ばれ、ニギニャはツチのリネージである。ルワンダ王国の拡大はニギニャリネージが他の地域への支配権を広げるなかで生じた。ルワンダの口頭伝承は、歴代

の王による周辺地域の征服の歴史を伝えている。口頭伝承のすべてを信じられないとしても、ルワンダ王国の拡大過程で征服が行われた可能性は高い。他方、王国の成立以前に牧畜民と農耕民との間に支配従属関係が存在していたことを示す証拠はないし、これまでの議論を考慮すればその蓋然性は低いといえよう⁸⁹。

ルワンダ王国の成立と王の系譜についてはさまざまな説がある。表1に代表的な説を示す。ルワンダの口頭伝承を最初に整理したカガメ (A. Kagame) は、実在が信じられている最初の王 (ルガンズ・ブウィンバ〈Ruganzu Bwimba〉) の即位を1312年としている。他方、カガメ説をはじめ先行ルワンダ史研究を批判的に検討したヴァンシナはそれを1482 (±12) 年 (Vansina [1962: 56]), レニ (Rennie) は1532年、ンクリキインフラは1468年としている (Newbury, D. [1994: 217])。ただし、いずれの説においても、ルガンズ・ブウィンバから1959年に死亡したムタラ・ルダヒグワ (Mutara Rudahigwa) まで21代の王の系譜を基本的に所与としたうえで、在位直後に日食があったとされるミバンブウェ・セエンタアビヨ (Mibambwe Seentaabyo) 王の即位年を基準として⁹⁰、それ以前は在位年に特定の数値を当てはめて王の即位年を推計する方法をとっている。表1をみれば明らかなように、カガメは33年、ヴァンシナは24年、レニは27年、ンクリキインフラは23年という数値を当てはめている。

歴代の王の系譜を前提としてもなお、ルガンズ・ブウィンバの即位年に200年以上の差が出るのだが、さらに近年になって、この系譜を所与の前提とできないのではないかという説も現れている。ルワンダ王の系譜は近隣の諸王国と比較して最も長い⁹¹が、これを周辺諸地域の史実と比較して再検討した Newbury, D. [1994]は、正統性を高めるために系譜の一部が意図的に繰り返された可能性がある⁹²と述べ、ルガンズ・ンドオリ (Ruganzu Ndoori) とチリマ・ルジュギラ (Cyilima Rujugira) に挟まれた5人の王について実在を疑問視している。彼自身認めているように、実在を主張するにせよ、疑問視するにせよ、現在のところいずれも推論にすぎず、決定的な証拠があるわけでは

表1 研究者によって異なるルワンダ王の年譜

王の名前	Kagame	Vansina	Rennie	Nkurikiyimfura
Ruganzu Bwimba	1312-1345 (33)	1458-1482 (24)	1532-1559 (27)	1468-1470 (2)
Cyilima Rugwe	1345-1378 (33)	1482-1506 (24)	1559-1586 (27)	1470-1520 (50)
Kigeri Mukobanya	1378-1411 (33)	1506-1528 (22)	1586-1588 (2)	1520-1543 (23)
Mibambwe Mutabaazi	1411-1444 (33)	1528-1552 (24)	1588-1593 (5)	1543-1566 (23)
Yuhi Gahima	1444-1477 (33)	1552-1576 (24)	1593-1603 (10)	1566-1589 (23)
Ndahiro Cyaamatare	1477-1510 (33)	1576-1600 (24)	1603 (0)	1589-1600 (11)
Ruganzu Ndoori	1510-1543 (33)	1600-1624 (24)	1603-1630 (27)	1600-1623 (23)
Mutara Seemugeshe	1543-1576 (33)	1624-1648 (24)	1630-1657 (27)	1623-1646 (23)
Kigeri Nyamuheshera	1576-1609 (33)	1648-1672 (24)	1657-1684 (27)	1646-1669 (23)
Mibambwe Gisanura	1609-1642 (33)	1672-1696 (24)	1684-1711 (27)	1669-1692 (23)
Yuhi Mazimpaka	1642-1675 (33)	1696-1720 (24)	1711-1738 (27)	1692-1715 (23)
Karemeera Rwaaka	—	1720-1744 (24)	1738-1756 (18)	1715-1731 (16)
Cyilima Rujugira	1675-1708 (33)	1744-1768 (24)	1756-1765 (9)	1731-1759 (27)
Kigeri Ndabarasa	1708-1741 (33)	1768-1792 (24)	1765-1792 (27)	1769-1792 (23)
Mibambwe Seentaabyo	1741-1746 (5)	1792-1797 (5)	1792-1797 (5)	1792-1797 (5)
Yuhi Gahindiro	1746- ?	1797-1830 (33)	1797-1830 (33)	1797-1830 (33)
Mutara Rwoogera	?-1853	1830-1860 (30)	1830-1860 (30)	1830-1860 (30)
Kigeri Rwaabugiri	1853-1895 (42)	1860-1895 (35)	1860-1895 (35)	1860-1895 (35)
Mibambwe Rutarindwa	—	1895-1896 (1)	1895-1896 (1)	—
Yuhi Musinga	1897-1931 (34)	1897-1931 (34)	1897-1931 (34)	—
Mutara Rudahigwa	1931-1959 (28)	1931-1959 (28)	1931-1959 (28)	—

(注) かつこ内は在位年を示す。

王名の表記については、Vansina [1962: 56]に従った。

カガメは、Karemeera RwaakaとMibambwe Rutarindwaについては、王位請求者にすぎず正式に即位していないとみなしている。Nkurikiyimfuraは植民地期以前の王の年譜のみを示している。

それぞれの出所は、Kagame [1959]、Vansina [1962]、Nkurikiyimfura [1989]である。RennieについてはNewbury, D.の論文中に示されていない。

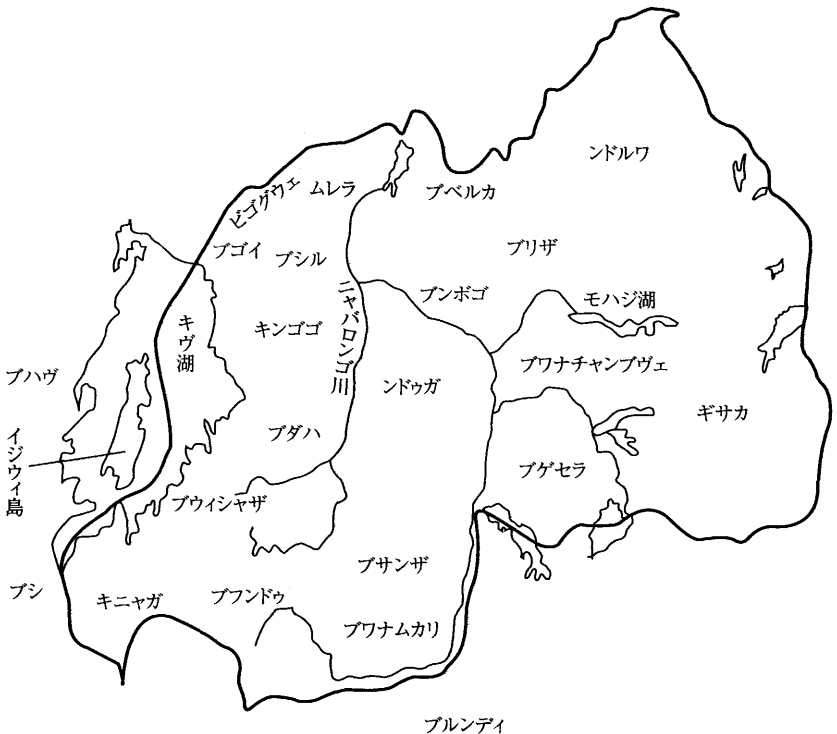
(出所) Newbury, D. [1994: 217].

ない。ただ、ルワンダ王の系譜は必ずしも確たるものではないし、それを根拠に導かれたルワンダ王国成立の年代もまた同様である。これまで一般にルワンダ王国の成立年代は14～15世紀と考えられてきたが、それより後の可能性も高い。

次に、ルワンダ国家の拡大過程について、ヴァンシナに依拠しながらその概略を述べる (Vansina [1962: 83-94])。図2、図3の地名と表2も参照されたい。ルガンズ・プウィンバが即位したとき、ルワンダはモハジ湖西側の小

さな国で、南にブゲセラ (Bugesera), 東側にギサカ (Gisaka), ンドルワ (Ndorwa) と接していた。周辺の国家と互いに襲撃を繰り返す状況が数代にわたって続くが、この間その領土に大きな変化はなかった。ミバンブウェ・ムタバアジ (Mibambwe Mutabaazi) のとき現在のウガンダ中部を本拠とするニヨロ (Nyoro) が来襲し、王はキヴ (Kivu) 湖西岸の地ブシ (Bushi) に逃れる。ニヨロが去った後、王はンドウガ (Nduga) を占領し、彼の逃亡中にギサカに占領されていた祖地の一部を奪還した⁹⁴。それ以来、このンドウガがルワンダ王国の中心部を成すことになる。彼と次代の時期には周辺国を攻

図2 植民地期以前のルワンダ周辺の地名

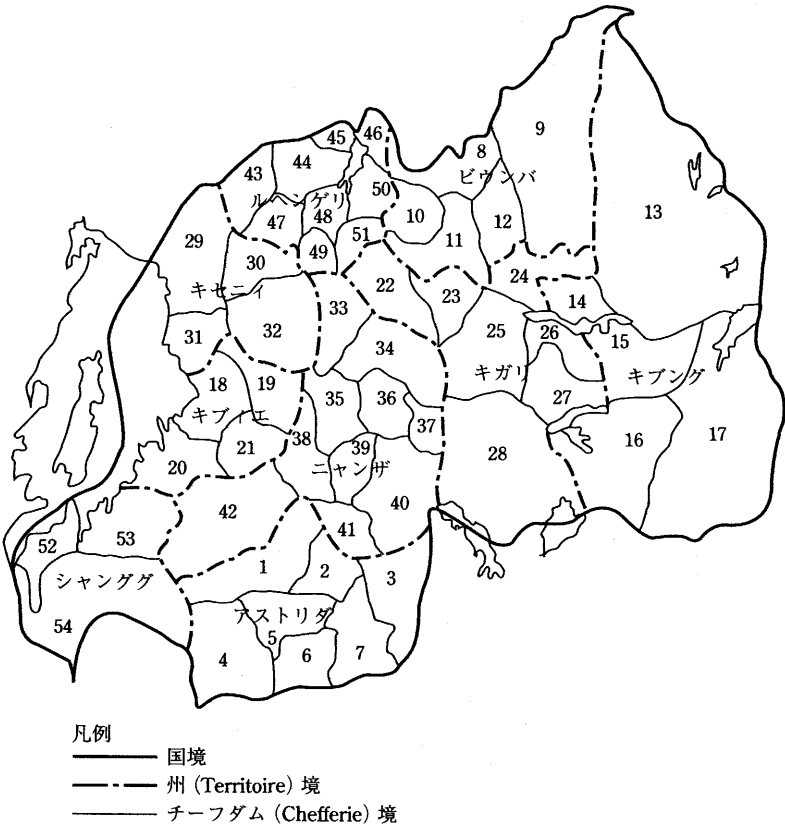


(出所) Lugan [1997: 94].

撃して勢力を拡大したが、ングヒロ・チャアマタレ (Ndahiro Cyaamatare) のときに危機が訪れる。キヴ湖西岸のハヴ (Havu) の攻撃を受けて王が殺され、領土の縮小を余儀なくされたのである。

次の王ルガンズ・ンドオリ (Ruganzu Ndoori) は国家の危機を救った英雄、ルワンダにおける戦士の原型として描かれる。彼はハヴを破り、以前の領土

図3 植民地期ルワンダのチーフダム (1949~50年の区分)



(注) この図は、植民地期後期の「チーフダム」(首長領)を示す。植民地期以前の統治構造から相当程度の改変がなされているが、地名を参照するのに簡便であるため掲載した。図中の番号に対応するチーフダム名については次ページ以下の表を参照のこと。

(出所) Nkurikiyimfura [1994: 48].

州別チーフダム名

アストリダ (Astrida) 州

番号	アルファベット表記	日本語表記
1	Bufundu	ブフンドゥ
2	Busanza (Sud)	ブサンザ (南)
3	Buhanga-Ndara	ブハンガンダラ
4	Buyenzi	ブイエンジ
5	Nyaruguru	ニヤルグル
6	Bashumba-Nyakare	バシュンバーニヤカレ
7	Mvejuru	ンヴェジュール

ビウンバ (Biumba) 州

番号	アルファベット表記	日本語表記
8	Ndorwa (BIUMBA)	ンドルワ (ビウンバ)
9	Mutara	ムタラ
10	Buberuka (BIUMBA)	ブベルカ (ビウンバ)
11	Rukiga	ルキガ
12	Biumba	ビウンバ

キブング (Kibungu) 州

番号	アルファベット表記	日本語表記
13	Mubali/Buganza (Nord-Est)	ムバリ/ブカンザ (北東)
14	Buganza (Est)	ブガンザ (東)
15	Buganza (Sud-Est)	ブガンザ (南東)
16	Gihunya	ギフニャ
17	Migongo	ミゴンゴ

キブイエ (Kibuye) 州

番号	アルファベット表記	日本語表記
18	Bwishaza	ブウイシャザ
19	Budaha	ブダハ
20	Rusenyi	ルセニイ
21	Nyantango	ニヤンタンゴ

キガリ (Kigali) 州

番号	アルファベット表記	日本語表記
22	Bumbogo	ブンボコ
23	Buriza	ブリザ
24	Buganza (Nord)	ブガンザ (北)
25	Bwanacyambwe	ブワナチャンブウェ
26	Buganza (Sud)	ブガンザ (南)
27	Rukaryi	ルカリ
28	Bugesera	ブゲセラ

キセニイ (Kisenyi) 州

番号	アルファベット表記	日本語表記
29	Bugoyi	ブゴイ
30	Bushiru	ブシル
31	Kanage	カナゲ
32	Kingogo	キンゴゴ

ニャンザ (Nyanza) 州

番号	アルファベット表記	日本語表記
33	Ndiza	ンディザ
34	Rukoma	ルコマ
35	Marangara	マランガラ
36	Nduga (Nord)	ンドウガ (北)
37	Mayaga (Nord)	マヤガ (北)
38	Kabagari	カバガリ
39	Nduga (Sud)	ンドウガ (南)
40	Mayaga (Sud)	マヤガ (南)
41	Busanza (Nord)	ブサンザ (北)
42	Bunyambili	ブニャンビリリ

ルヘンゲリ (Ruhengeri) 州

番号	アルファベット表記	日本語表記
43	Rwankeri	ルワンケリ
44	Mulera	ムレラ
45	Bukamba	ブカンバ
46	Ndorwa (RUHENGERR)	ンドルワ (ルヘンゲリ)
47	Buhoma	ブホマ
48	Bugarura	ブガルラ
49	Bukonya	ブコニヤ
50	Buberuka (RUHENGERR)	ブベルカ (ルヘンゲリ)
51	Kibari	キバリ

シャンググ (Shangugu) 州

番号	アルファベット表記	日本語表記
52	Impara	インバラ
53	Cyesha	チェシャ
54	Bukunzi-Busozo	ブクンジーブソゾ

チーフダム名 (アルファベット順)

番号	アルファベット表記	日本語表記
6	Bashumba-Nyakare	バシウンバーニヤカレ
12	Biumba	ビウンバ
10	Buberuka (BIUMBA)	ブベルカ (ビウンバ)
50	Buberuka (RUHENGERR)	ブベルカ (ルヘンゲリ)
19	Budaha	ブダハ
1	Bufundu	ブフンドユ
14	Buganza (Est)	ブガンザ (東)
24	Buganza (Nord)	ブガンザ (北)
26	Buganza (Sud)	ブガンザ (南)
15	Buganza (Sud-Est)	ブガンザ (南東)
48	Bugarura	ブガルラ
28	Bugesera	ブゲセラ
29	Bugoyi	ブゴイ
3	Buhanga-Ndara	ブハンガンダラ
47	Buhoma	ブホマ
45	Bukamba	ブカンバ
49	Bukonya	ブコニヤ
54	Bukunzi-Busozo	ブクンジープソゾ
22	Bumbogo	ブンボコ
42	Bunyambilili	ブニャンビリリ
23	Buriza	ブリザ
41	Busanza (Nord)	ブサンザ (北)
2	Busanza (Sud)	ブサンザ (南)
30	Bushiru	ブシル
4	Buyenzi	ブイエンジ
25	Bwanacyambwe	ブワナチャンブウェ
18	Bwishaza	ブウィシャザ
53	Cyasha	チュエシヤ
16	Gihunya	ギフニヤ
52	Impara	インバラ
38	Kabagari	カバガリ
31	Kanage	カナゲ
51	Kibari	キバリ
32	Kingogo	キンゴゴ
35	Marangara	マランガラ
37	Mayaga (Nord)	マヤガ (北)
40	Mayaga (Sud)	マヤガ (南)
17	Migongo	ミゴンゴ
13	Mubali/Buganza (Nord-Est)	ムバリ/ブカンザ (北東)
44	Mulera	ムレラ
9	Mutara	ムタラ
7	Mvejuru	ンヴェジュル
33	Ndiza	ンディザ
8	Ndorwa (BIUMBA)	ンドルワ (ビウンバ)
46	Ndorwa (RUHENGERR)	ンドルワ (ルヘンゲリ)
36	Nduga (Nord)	ンドウガ (北)
39	Nduga (Sud)	ンドウガ (南)
21	Nyantango	ニヤンタンゴ
5	Nyaruguru	ニヤルグル
27	Rukaryi	ルカリ
11	Rukiga	ルキガ
34	Rukoma	ルコマ
20	Rusenyi	ルセニイ
43	Rwankeri	ルワンケリ

(注) Ndorwa, Buberuka というチーフダム名はルヘンゲリ, ビウンバの
両州に存在する。

表2 植民地期以前のルワンダ王と在位時の状況

王の名前	主な出来事
ルガンズ・ブウィンバ	ギサカと戦闘。
チリマ・ルグウェ	
キゲリ・ムコバナヤ	西側の aboongera クランの小国家を征服。abatsoobe クランに対しては裁判権保有者（アビイル）の地位を与えることを条件に同盟を結ぶ。
ミバンブウェ・ムタバアジ	ブリザで aboongera クランが蜂起するが鎮圧。ニョロ侵攻のため、王は一時キヴ湖西岸のプシに逃げる。ニョロ撤退後ンドウガを占領し、以後ここがルワンダの中心となる。
ユビ・ガヒマ	西側ではニャバロンゴやブウィシャザ、東ではムバリを襲撃。
ングヒロ・チャアマタレ	ハヴの攻撃を受けて死亡。領土はンドウガ、ブリザ、ブンボゴの半分など。
ルガンズ・ンドオリ	西のブウィシャザ、ブダハ、イジウイ島を攻撃。ハヴを破る。
ムタラ・セエムゲシ	ブングウェ併合。
キゲリ・ニヤムヘシエラ	ギサカからブワナチャンブウェを奪還。ルセニイの王を殺し、併合のために軍を駐屯させる。
ミバンブウェ・ギサヌラ	
ユビ・マジンバカ	ブルンジの攻撃が激化。
カレメエラ・ルワアカ	ブングウェの一部を失う。
チリマ・ルジュギラ	ブングウェ奪還。ンドルワ、ギサカに遠征し、ンドルワの一部を占領。ブゴイを平定。各地に親族や取り巻きをチーフとして派遣。
キゲリ・ングバラサ	ムバリ併合。ンドルワに王都建設。キニヤガを軍により征服。ギサカの攻撃を受ける。
ミバンブウェ・セエンタピヨ	ブゲセラがブルンジの攻撃を受けて弱体化。その北部はルワンダへ同化。ギサカに遠征。ンドルワ蜂起。
ユビ・ガヒンディロ	ンドルワを制圧。キングゴ、ムレラにチーフ任命。プシに遠征。ブルンディ、カラグウェの攻撃を受ける。
ムタラ・ルウォオゲラ	ギサカ征服。ンドルワの反乱。貢納支払いを拒否するムレラへ討伐隊送る。
キゲリ・ルワアブギリ	ブゴイ、ブウィシャザ、キングゴ、ムレラなどに支配確立。ブフンデ、イジウイ、プシを攻撃。行政機構の整備。ンコレ攻撃。ブルンジへの遠征は失敗。

(出所) Vansina [1962: 83-94]を参考にして筆者作成。

を回復した。さらに、ルセニイ (Rusenyi)、ブウィシャザ (Bwishaza)、ブダハ (Budaha) など西部、北部に遠征して襲撃を加えた。次のキゲリ・ニヤムヘシェラ (Kigeri Nyamuheshera) の時代、ルワンダはンドウガなど中心部での支配を確立し、さらにルセニイなど中西部にも軍を送って統治体制を築こうとした。これら周辺国家を襲撃し、その王を殺した後に、そこに軍を派遣してルワンダに対する貢納を供出させようとしたのである。しかし、地方での貢納供出はなかなか進まず、それを促すために何度も討伐隊を送らねばならなかった。

ルワンダ王国の領土が大幅に拡張するのは、チリマ・ルジュギラ期以降である。彼は、東部のンドルワとギサカに遠征し、両国に甚大な損害を与えた。ただし、ンドゥルワにせよギサカにせよ、ルワンダの影響下に入った後も反乱と蜂起を繰り返し、植民地期以降になっても独自のアイデンティティを保持していた⁹⁹。領土拡張は、直接的な戦闘によって相手国の王を殺害したのち、ルワンダ国王の親族や取り巻きをチーフとする軍を派遣し、貢納を供出させるという過程をとる。したがって、領土の拡張とはいっても明確な境界線が引けるわけではなく、戦闘で勝利した後も住民が恒常的に貢納を供出するまでには長い時間が必要だった。武力による制圧後も貢納供出拒否と討伐隊派遣が繰り返されたのであり、これは急速な領域拡張を遂げたとされるキゲリ・ルワアブギリ (Kigeri Ruwaabugiri) 期でも同様だった。彼は、対外的には周辺国への攻撃を繰り返し、対内的には統治体制の強化と統一的な行政制度導入に腐心して一定の成功を収めたが、なお国内外で反乱が絶えなかった。結局、ルワンダ王国の領土が確定するのは植民地化によってであり、国内が完全に平定されるのも圧倒的な武力をもつ植民地権力がルワンダ国王を支援して反乱軍討伐に協力するようになって以降のことであった。

このようにルワンダ王国史をみてくると、それが急速に拡大したのはチリマ・ルジュギラの統治期以降、おそらく18世紀より後のことであった。したがって、植民地化直前のルワンダ王国では、領土の大半は征服されてから歴史が浅く、なお反乱を繰り返す状況にあった。この時期のルワンダ王国は、

中心核と流動的なフロンティアから成っていたといえよう。中心核とはインドゥガなどルワンダ王宮に近い地域である。それを取り巻く地域はなお統合の過程にあり、ルワンダ王宮はその親族などを派遣して貢納取り立てに躍起になってはいたが、それは必ずしも順調に進んでいなかった。植民地化直前のルワンダ王国がすでに数世紀にわたる国家形成過程を経ていたことは確かだが、それは統一国家と呼べる状況ではなかったし、ましてや近代国民国家とは大きく異なっていた。

第3節 植民地化直前のツチとフツ

ここまで、19世紀末に至る歴史過程を中心に述べてきたが、本節では植民地化直前のルワンダ社会における諸制度をとりあげ、そこにおけるツチとフツとの関係について検討を加える。ツチとフツの間に支配従属関係が成立していたとするなら、それは統治制度をはじめとする諸制度のなかに最も明確に示されるであろう。事実、これまでルワンダにおけるツチ、フツ間の支配従属関係は、さまざまな制度に対応させる形で論じられてきた。本節では、そうした議論がどの程度正しいのか、あるいはどの程度相対化されるべきものなのかについて検討を加えることとしたい。

1. 諸制度の理念型

まず、ルワンダ王国の統治制度について概説する。統治制度はまさに国家におけるヒエラルキーを表すから、集団間の支配従属関係もそこに現れる可能性が高い。じっさい、植民地期以前のルワンダを征服国家とみなし、その社会の特質をツチによるフツの支配と捉えた従来の見解は、その政治組織がツチの支配を固定化していると主張していた (Maquet [1961: 158])。したがってまず、統治のなかでツチとフツがどのように位置づけられていたのかを検

討してみよう。

統治制度の理念型を Vansina [1962: Chapter IV] に従って述べることにする。ルワンダ王国の頂点には王 (*umwaami*) がおり、国家は彼に帰属すると考えられていた。ただし、王は統治にあたって専制的に振る舞うのではなく、アビイル (*Abiiru*) と呼ばれる集団の支持を必要とした。アビイルはいわば王の顧問団であるが、彼らは祭司の役割をもつと同時に王位継承にも影響力をもっていたので、王はその存在を無視できなかつた⁸⁹。国土は州 (*ubutaka*) に分割され、それぞれ統治のための大チーフ (*umutare w'ubutaka/umutare w'intebe*) が任命された⁹⁰。ここで州は放牧のための単位と考えられており、その境界は固定されたものではなかつた。王が変わるたびに違ったチーフが任命されることも多く、州境はその都度変更されたのである⁹¹。国土はまた県 (*district*) に分割され、王が任命する県チーフによって統治された。県チーフは原則として2名ずつおかれた。農産物貢納の徴集を担当する土地チーフ (*umunyabutaka*) と畜産物貢納の徴集を担当する牧畜チーフ (*umunya-mukenke*) がそれである。これら2人の県チーフは、大チーフの任命するサブチーフ (丘チーフ/*umutare b'umusoozi*)⁹²を仲介役として地域行政を行った。各県には王都がおかれ、そこは王宮の直轄地とされた⁹³。州を統治する大チーフは原則として王宮にいなければならなかつたので、実際の地方行政を担当するのは県チーフであり、彼らの役職には特権も多かつた。

19世紀の統治制度のなかでツチとフツはそれぞれどのような位置を占めていたであろうか。統治構造の上層部はツチが占めていたといてよい。王はニギニヤというツチリネージから選ばれ⁹⁴、その妻も特定「クラン」のツチリネージから選ばれた。大チーフに任命される王の取り巻きもツチであつた。ただし、マケによれば、県チーフのうち土地チーフについては「フツ」が任命される可能性があつた⁹⁵。これは、土地チーフの主たる役割が農産物貢納の徴集であり、その役職には当該地域の農産物生産地に対する実質的な権利をもつ者が任命されたからである。土着のリネージが土地に対する権利を保持する地域では、そのリネージの長が土地チーフに選ばれ、結果的にツチに

かぎらず土地チーフの役職に就任できたということであろう⁴³。これはサブチーフについても同様であった (Newbury, C. [1988])。しかし、土着のリネージによる土地保有権は王国の中央部では必ずしも保証されていなかった。そこでは特殊な土地制度が展開していたからである。

独立直前まで、ルワンダには異なった2種類の土地制度が存在した。第1に土着のリネージが土地保有権を有するウブコンデ (*ubukonde*) 制度である⁴⁴。ある土地に対してそこを最初に開墾した親族集団が保有権を得るというこの制度は、アフリカ各地で見られるものである。第2にイギキンギ (*igikingi*) 地がある。イギキンギとは、王がチーフに与える放牧地である。イギキンギは丘を単位として与えられるが、それらの丘はチーフに所属するものとされ、そこでの土地配分にはチーフが実質的権利を行使した。すなわちそこで土地への権利は事実上土着のリネージから剥奪され、領主的支配が行われていたのである。イギキンギは、19世紀前半のユビ・ガビンディロ期に始まったとされるが、表3に示すようにルワンダ王国の中心である中南部と東部に突出して多かった (Nkurikiyimfura [1994:91-99])。イギキンギ地においては、土地に対する権利はそこに封じられた有力者に移転したが、そうした有力者は多くの場合王の親族や取り巻きであった。

王を頂点とした統治制度は、パトロン・クライアント関係によって支えられていた。その代表例として研究者の関心を引いてきたのがウブハケ (*ubuhake*) 制度である。これは、社会的威信や所有する富において劣る個人がそれらに優る個人との間に結ぶ関係で、ガラグ (*garagu*) と呼ばれる前者 (クライアント) はシェブジャ (*shebuja*) と呼ばれる後者 (パトロン) に対してさまざまなサービスを行い、後者はその見返りとして手助けや保護を行うというものである。この合意が結ばれると、シェブジャからガラグに雌牛が送られ、ガラグはその用益権を与えられる。子牛が生まれればそれらについてもガラグは同様に用益権を得る。ウブハケ関係のもと、ガラグはシェブジャから生活支援、法的係争時の救援、親族の殺人に対する復讐、親族の世話などさまざまな保護を期待できる。その対価としてガラグは、シェブジャが遠出

表3 1900年頃の地域別イギキンギ数

地域	地区名	イギキンギ数	地域総数
北西部	ブゴイ (Bugoyi)	3	4
	ブベルカ (Buberuka)	1	
西部	ブウイシャザ (Bwishaza)	1	6
	ブダハーニヤンタンゴ (Budaha-Nyantango)	5	
北・北西部	ルキガ (Rukiga)	1	7
	ブンボゴ (Bumbogo)	1	
	ムタラ (Mutara)	1	
	ムバリ (Mubari)	1	
	ギサカ (Gisaka)	3	
東部	ブガンザ (Buganza)	19	28
	ブリザ (Buriza)	4	
	ブワナチャンブウェ (Bwanachambwe)	5	
中南部	ンディザ (Ndiza)	4	76
	ルコマ (Rukoma)	14	
	マランガラ (Marangara)	4	
	カバガリ (Kabagari)	3	
	ンドゥガ (Nduga)	9	
	ブサンザ (Busanza)	12	
	ブリマ・マヤガ (Bulima+Mayaga)	16	
	ブフンドウ・ブニャンビリリ (Bufundu+Bunyambillili)	3	
	ブワナムカリ (Bwanamukali)	11	

(出所) Nkurikiyimfura [1994 : 95].

する際 (王宮への召喚, 戦闘のための遠征など) の随行, 主人の家の修繕, ビールその他の贈り物や貢納, 主人の畑での賦役, 主人宅の夜警といった義務を負った⁶⁹。マケは, ウブハケ制度が封建的な性格をもち, ツチ, フツ, トゥワから成る「カースト構造」の結合を強めて, 社会秩序を維持する機能を果たすと論じた (Maquet [1961 : 133-142])。

2. 「ツチ支配」の実態

このようにみてくると, 植民地化以前のルワンダでは, ツチが中枢を占める統治がなされ, ツチのチーフが土地保有権を得る領主制的土地制度が成立し, ツチとフツとの支配従属構造がパトロン・クライアント関係によって固

定化されていたかのような印象を受ける。じっさい、1960年代までは研究者の間でもそのような見解が主流であった。しかしながら、植民地期以前にツチによる支配が構造化されていたとする見解は、その後より精緻な実証研究によって根本的に批判されることになる。こうした「支配の構造」なるものは、かなりの程度相対化して考える必要があることが分かってきたのである。

まず第1に留意すべき点は、統治の空間的な問題である。第2節でも述べたように、ルワンダ王国は植民地化されるまで統一的な統治制度を確立することがなかった。王宮に近い中心部でヒエラルキーの統治構造が成立しているにもかかわらず、北部や西部に対してその影響力は十分に及ばず、そこでは土地権利は依然として多くの場合土着リネージの手にあった。とりわけ北部に対して王宮の支配はほとんど及ばず、植民地化以降数度の反乱を経てようやく中央に従属するようになる⁶⁶。植民地化以前、これらの地域に対して中央の統治は十分に及ばず、徴税圧力もさして強くはなかった。王宮による集権的な統治の程度は、地域によってかなりの濃淡があったのである。地方においてはツチ、フツという概念すら浸透しておらず、そのような区分にもとづくアイデンティティーは希薄であった。例えば南西部のキニャガにおいては、「誰であれンドウガから来たものはツチと呼ばれた」一方で、もともとの居住民は「すべてフツと呼ばれた」のである⁶⁷。

第2に時間的な問題である。植民地期以前に貢納や賦役の賦課圧力が高まるのは、土地に対するコントロールの強化と並行すると考えてよい。土着権力が土地に対する権利を保持しているかぎり、王宮に戦闘で敗れたとしても、支配従属関係は可逆的である。王宮がいったんは征服したはずの地域で反乱が繰り返され、討伐隊が何度も送られていることは第2節でみたとおりである。しかし、土地権利がローカルなりネージ代表の手を離れて王宮に近いチーフの手に移ったとき、支配従属関係は構造化され、住民たちはチーフによる厳しい賦役、貢納の要求に曝されることとなる。王宮から任命されたツチのサブチーフ就任やイギキンギ地の成立は、こうした事態を招くであろう。イギキンギ地が成立するのは19世紀に入ってからであり、それが拡大するの

は19世紀後半のルワブギリ王の治世であった。この時代ルワンダ王国は、彼の強力なリーダーシップのもとで対外的には領土拡張、対内的には集権的統治を進めた。ここで行政機構が整備され、住民への徴税圧力が高まるのである。換言すれば、ルワンダ中央部においても、王を頂点とした集権的統治構造が確立するのは植民地化の直前にすぎない。

第3にパトロン・クライアント関係の性格について留意すべき点がある。従来、例えばマケの説に代表されるように、パトロン・クライアント関係のなかでウブハケのみが「ツチによるフツ支配の手段」として注目され、牛を介して結ばれる関係性だけが重視されてきた (Maquet [1961])。牛のもつ文化的価値を根拠に、それを所有するツチがウブハケを通じてフツを支配したと考えられたのである。しかし、1960年代末以降、より厳密な手法にもとづく歴史研究が現れ、ウブハケ理解は根本的に修正された。植民地化以前においては、ウブハケは専らツチとツチとの関係であって、ツチとフツとがそうした関係を結ぶことは稀であった⁶⁸⁾。この個人的なパトロン・クライアント関係がツチとフツとの間に急速に広まるのは植民地期であって、それは植民地権力によるフツ差別の制度化とフツの生活の不安定化に対応していた (Vidal [1969], Newbury, C. [1974], [1988])⁶⁹⁾。

新たなウブハケ理解は、牛の文化的価値をツチ支配の根拠とする従来の説を覆した。植民地期以前に一定の時間的空間的範囲でツチの支配が成立していたとすれば、その要諦は牛ではなく土地にあった。土着リネッジの代表者ではなく王宮の意向を受けた人物をサブチーフに任命したり、あるいはイギキンギ地をチーフに与えることによって、王宮は土地権利を土着リネッジから剥奪した。そうした土地コントロールの強化と並行して、農耕民にパトロン・クライアント関係が賦課されていったのである。この点で通説は論理が逆転していた。牛の文化的価値がツチ支配をもたらしたのではなく、王宮が土地への権利を獲得することでそこに居住する農耕民への支配を強め、それを前提に牛を介するウブハケ関係が成立したのである。

第4に、ツチのなかに経済分化が進行していたことである。統治構造の中

枢にツチがおり、彼らが賦役や貢納を得ていたとしても、ツチのすべてがそのような富の分配にあずかれるわけではなかった。ツチのなかにも貧しい者がおり、フツ⁶⁰のなかにも豊かな者が存在した (Vidal [1974: 56-62])。これはツチとフツの混交を促す。貧しいツチはほとんど牛をもてず、したがって花嫁代償を支払えないためにフツと結婚せざるをえなかった。逆に豊かなフツは、十分な花嫁代償を用意できればツチと結婚できた。二つの集団は、内婚を原則とするという建前とは異なり、絶えざる混交が続いてきたと考えられる (d'Hertefeldt [1971: Chapter 4])⁶⁰。

ただし、ツチによるフツ支配という考え方を相対化するこれらの論点にもかかわらず、植民地化以前のルワンダ王宮において、ツチ支配を正当化するイデオロギーが構築されていたことは認めるべきであろう。ツチによるフツ、トゥワの支配に関する神話は数多い⁶¹。そうした神話が植民地期につくられた可能性も否定できないが、すべてを植民地期の産物とみなすことには無理がある。

さらに、ツチ支配のイデオロギーは、あえてリュガンの言葉を用いれば、「人種的」な性格を帯びていたと考えられる。ここで「人種的」とは、ゴビノーらの白人至上主義を意味するのではなく、自集団の出自をその他の集団とは異なる起源に求め、かつ特定の身体的特徴に価値をおいて、その維持に努める心性を指している。こうした心性の存在は、先述した神話のほかにもいくつかの点から傍証できる。例えば、少なくとも建前ではツチ、フツ、トゥワが内婚集団とされていたことは先に述べた。また王宮では長身瘦躯のステレオタイプな「ツチ的」体型が理想と考えられていたとの指摘もある (Lugan [1997: 115])。実際、王やその取り巻きにこうした体型の者が多かったことは写真などからもわかる。こうした心性が何に由来するのかわからないが、それはツチ支配イデオロギーの重要な要素の一つであったと考えられる。この点で、植民地期以前のツチ、フツ関係には、経済的な水準には還元できない要素が含まれていた。

以上の点を考えあわせると、植民地化直前のルワンダにおけるツチ、フツ

関係について暫定的な結論を導くことができる。王国の中心部では、王宮が土地分配に影響力を及ぼし、結果的に王宮およびその直接のクライアントである大チーフが農耕民から賦役や貢納を受け取る領主制的体制が成立していた。この場合、前者はツチで後者はフツとみてよい⁶⁹。ただし、この体制は19世紀に入ってから本格的に形成されたものであり、その意味で歴史が浅く、領域的にも王国中心部に限定されていた。もちろんそれ以前にも戦争を通じた征服はあったが、それは散発的、可逆的なものであって、それによってさまざま重い賦役や貢納が課されたわけではない。賦役、貢納の常態化は、王宮が土地をコントロールすることによってはじめて可能になったのである⁶⁹。

それではなぜ19世紀に入って、イギキンギ地が誕生、発達し、王宮による土地のコントロールが可能になったのであろうか。二つの理由が考えられる⁶⁹。第1に、ルワンダ王国が周辺国への攻撃を繰り返し、近隣地域を軍事的、人的に従属させつつあったことである。ルワンダ王国は新たな土地を征服すると、そこに王の親族や取り巻き（ツチと考えてよい）を入植させてその地域の行政を担わせた。1回の攻撃、征服では強固な支配はできないにしても、それが繰り返され王の親族らの入植が重なることによって、ルワンダ中央部には王宮の支配が貫徹するようになっていたと考えられる。

第2に、農業生産力の発展である。イギキンギの誕生に先立つケグリ・ンダバラサ (Kigeri Ndabarasa) の統治期頃、一般の農民にも鉄製の鋤が容易に入手できるようになり、これによって耕作面積の増大が実現された (Nkurikiyimfura [1994: 88-89])。口頭伝承にもとづいて植民地化以前の時期区分を試みたルワブクンバラも、「開墾者の時代」と呼ばれる時期があり、その時代には人々が森林を開拓してリネージの祖となったと述べている (Rwabukumba et Mudandagizi [1974: 10-12])。18世紀の技術革新によって優れた農具が大衆の手に渡り、開墾が急速に進んだのであろう⁶⁹。農業生産力の発展は、人口増加に結びつき、それによって土地をめぐる競争がさらに激化した。植民地化直前のルワンダの人口は100万人程度と推定されるが、これは単純に計算して、1平方キロメートル当たり38.0人という高い人口密度になる。こうし

た状況のなか、王宮の影響力が強い地域でイギキングが誕生したとみるのが妥当であろう。

結びにかえて

ルワンダ史研究は近年大きく進展し、それにもなって従来の説は大幅な修正を余儀なくされている。「最初にトゥワがおり、それからフツが来て、最後にツチが移住してルワンダ王国を築いた」というステレオタイプなルワンダ史理解は妥当性を失った。ツチにせよ、フツにせよ、もともと出自を異にするひとまとまりの集団であったとは考えにくい。

紀元前の大湖地域は、ナイル・サハラ語族（ナイロート系諸語）、アフロ・アジア語族（南クシ系諸語）、ニジェール・コルドファン語族（バンツー系諸語）に属するさまざまな言語の話者が混在して暮らす領域であった。そのなかで隣接集団の技術を取り入れたバンツー系言語話者が生産力を拡大し、彼らの言語文化が支配的な空間を創造する。そこから土地へのアクセスをめぐる競争を背景として、農耕あるいは牧畜に重きをおく生業集団が現れてくる。ルワンダ国家の形成と発展は、大湖地域の肥沃な大地——「緑なす良き地」(Schoenbrun [1998])——におけるこうした集団間の相互作用の延長線上に位置づけられるべきなのである。

ルワンダ王国は18世紀以降急速にその影響力を拡大する。ただしそれは近代国家とは異なり、王宮を中心とする核と流動的なフロンティアから成る、多分に生成途上の国家であった。核の部分では土地のコントロールにもとづく「領主的支配」が成立していても、そこからわずかに離れば王宮とはアイデンティティーを異にする集団が反乱と貢納拒否を繰り返していたのである。この国家が確たる領域と統一的な統治機構を確立するのは、植民地権力の支配下でのことであった。

ルワンダにおける農耕民と牧畜民との関係は、長らく基本的に対等であっ

た。両者の関係は財やサービスの交換が主であって、どちらかが一方的に支配し搾取する関係ではなかった。両者の関係が変化する最大の契機は、19世紀に生じた王国中心部の土地制度変容である。ここにおいて王宮は、土着リネージから土地権利を剥奪し、賦役、貢納を吸い上げる制度をつくりあげた。そしてそれに対応する形で、王宮において精緻化され、人種的な性格をもつ「ツチ支配」のイデオロギーが徐々に広まっていったと考えられる。王国周縁部のフロンティアにあっては、19世紀末に至ってもツチという概念は広まっておらず、自分たちがフツだという認識もなかった。フツというアイデンティティーが全国に浸透するのは、植民地期の抑圧を経た後のことである(Newbury, C. [1988])。

結局のところ、植民地期以前のルワンダにおけるツチ、フツとは何であったのか。これまでの検討を踏まえ、筆者はツチ、フツ概念の起源について次のような仮説を提示したい。ツチとは、ルワンダの内発的な国家形成の過程で生まれた、人種的イデオロギーをもつ支配集団であった。ツチ・アイデンティティーの形成と発展は、王宮による支配の拡大、強化と密接に結びついていた。他方、フツとはその残余であった。王宮を中心とする支配、統治の権力から疎外された人々が、「ツチではない」という理由で「フツ」と呼ばれたのだと考える。最初に紹介したリュガンとクレティアンの論争に引き寄せていえば、植民地期以前のツチ、フツ関係における「人種的」な側面のみを強調するリュガンの議論の誤りは明白である。その一方で、クレティアンが両者の関係を経済的なものにすぎないと考えているとすれば、それもやはり不十分といわざるをえない。

植民地期直前の段階において、ツチから「フツ」と呼ばれる人々が存在していたとしても、彼らがフツ・アイデンティティーを重要なものと認識していたとは考えにくい。じっさい当時には、ツチとフツとの境界線は曖昧なものにすぎなかった。しかし、曖昧なアイデンティティーから出発したとはいえ、植民地期になるとツチ、フツ概念はヨーロッパの人種観にもとづいて再解釈され、確固たる区分として用いられるようになる。その結果、対自的集

団としてのフツが現出し、1959年の武力衝突に至る。暴力的対立を幾度となく繰り返した現在、ツチ、フツという集団はエトニー (ethnie) という範疇におさまるものとなった。両者は、それぞれ相手から受けた暴力の記憶を反芻し、憎しみという共通の感情を抱く「恐怖の共同体」⁸⁰と化したからである。こうした感情を解きほぐすためにどのくらいの時間と努力が必要なのか見当がつかない。ただ、いずれにしても、正確な事実を解明するという姿勢からしか何事も始まらないのではなかろうか。筆者自身、本章をその出発点と位置づけている。

〔注〕

- (1) ツチ (Tutsi, Tuutsi), フツ (Hutu) は、いうまでもなくトゥワ (Twa) とともにルワンダの「部族」である。本章では、例えばツチ人、フツ族といった呼称ではなく、ツチ、フツという呼称を用いる。以下本章で論じるこれら集団の形成過程を踏まえれば、「人」、「族」といった言葉を語尾につけない方がよいと考えたからである。
- (2) ルワンダの虐殺をナチスの行為になぞらえることについては、異論があるかも知れない。強制収容所で組織的、機械的に殺戮を行ったナチスと比べれば、1994年のルワンダで実際の殺戮行為に手を下した人間の数はおそらくずっと多いであろう。
- (3) もちろん、この大虐殺においてはツチとともに穏健派、反体制派のフツが標的にされ、大量に殺害されたことを忘れてはならない。この事件が、ハビヤリマナ政権中枢が自らの権力保持を狙って行った煽動のなかで発生したことは周知の事実である。ただ、国際刑事法廷で「ジェノサイド」の罪が審議されていることからわかるように、この虐殺が「ツチに対する選別的殺戮」という側面をもったことは事実である。
- (4) 1990年代ルワンダ（およびブルンジ）で危機的状況が明瞭になるにつれ、多くの分析が現れた。虐殺以降の出版物は無数といってよいが、現代史に関する主要な研究書についてのみ簡単に整理しておく。研究のさきがけとなったのは、Reyntjens [1994a]である。これはルワンダ虐殺が勃発する直前の状況を受けて書かれ、まさに虐殺のさなかに出版されたこともあって大きな反響を呼んだ。虐殺の後、素早く反応したのものとしては Braeckman [1994]が読みやすく、かつ水準が高い。フランスの代表的なアフリカ研究誌である *Cahiers d'études africaines* は、代表的なルワンダ研究者ヴィダルらの寄稿を緊急に掲載した (Kagabo et Vidal [1994])。その後、今日に至るまで数多くの研究が出版されている。政治史的な

アプローチでは Prunier [1995], Willame [1995], Reyntjens [1995], Nkunzumwami [1996] などがある。多数の研究者が参加した多角的分析としては, Guichaoua dir. [1995], Verdier, Decaux et Chrétien dir. [1995], Marysse et Reyntjens dir. [1997] などが代表的であろう。虐殺に果たしたマス・メディアの役割に焦点を当てたものとして Chrétien dir. [1995] がある。大湖地域近現代史について積極的に発言してきた彼の論考は, Chrétien [1997] にまとめられている。その他, Vidal [1995] (および同論文が掲載されている *Afrique contemporaine* 誌の特集) や Mamdani [1996] も歴史的枠組みから興味深い分析を展開している。また, コンゴ民主共和国東部を含む大湖地域の引き続き危機を受けて書かれたものとして, Lugan [1997], Willame [1997] などがある。

- (5) 1959年には、ルワンダでツチとフツとの間に初めて集団間の暴力的対立が起こった。独立を控えてフツ、ツチそれぞれに基盤をおく政党間の対立が激化し、それを直接の契機として暴力的混乱が勃発した。これによりツチの政治的支配体制が事実上崩壊し、多数のツチが難民化した。60年代初頭には、国外に逃れたツチ急進派がルワンダに対してゲリラ攻撃を繰り返し、そのたびに報復として多数のツチが国内で殺害された。63年はそのなかで最も犠牲者の多かった年である。73年には、独立以来ルワンダを率いてきたカイバンダ体制が脆弱化し社会的混乱が広がるなかで、全土の職場や学校でツチ排斥運動が広がった。これによってまたも多数のツチが犠牲となり、国外に逃れた。
- (6) リュガンが主たる批判の対象とする Chrétien [1985] では、植民地化以前の状況について踏み込んだ議論がなされているわけではない。クレティアンは、19～20世紀初頭のヨーロッパ人種思想にもとづいて、ツチ、フツに関する人種的な意味づけがなされたことをこの論文で論じたうえで、植民地期以前の両者の関係は経済的なものと考えられまいかと思っているだけである。明らかに、植民地化以前の両者の関係について議論することは、この論文の主題ではない。ただ、ルワンダ、ブルンジの現状について積極的に発言し、かつ植民地期の重要性について声高に主張するクレティアンは、ブルンジ研究者として出発したこともあってか、植民地期以前のルワンダについては全くといっていいほど議論していない。こうした点が、リュガンら批判者の「それは科学なのか、それとも政治なのか」という苛立ちにつながるのであろう。
- (7) ルワンダ、ブルンディ、ンコレ (Nkole) など大湖地域の伝統国家には同様の社会階層がみられ、それぞれツチとフツ、ヒマ (hima) とイル (iru) などと呼ばれている。これらの集団をどう捉えるかはかなり共通した問題である。
- (8) 大まかにいって、植民地期の研究や行政文書ではツチ、フツ、トゥワを「人種」(race) と表現するが多い。その後、独立前後には「カースト」という呼び方が多くなり (Maquet [1961])、その後「カースト」が含意する固定性を批判する意味で「社会階級」(classe sociale) という言葉を使う論者が現れた (d'Hertefeldt [1971])。最近では、仏語文献では「エトニー」を使うことが一般的である。

- (9) ツチ、フツの起源について考察する場合、その言葉の原義がいかなるものかを解明する必要があるが、これについて論じた研究は管見のかぎり見当たらない。したがって、この問題はさしあたり棚上げし、本章では大湖地域史、ルワンダ史のなかでツチ、フツの位置づけについて検討していくこととする。
- (10) ツチとフツとでルワンダ総人口の99%程度を占める。
- (11) 紀元後1000～1999年 (second millennium) を紀元後第二千年紀という訳語で表す。同様に、紀元後0～999年を紀元後第一千年紀と表す。
- (12) 「ワフマ」(Wahuma) とは、現在のヒマを指す。ヒマについては注(7)参照。
- (13) スピークは、「ワフマの身体的特徴から判断して、彼らがエチオピアの半セム・ハム人 (semi-Shem-Hamitic) 以外の人種であるとは信じられない」と述べている (Speke [1864: 246])。
- (14) 1994年の虐殺時に扇動的放送を流し続けたラジオ・ミルコリンヌ (Radio Mille Collines) において、ツチはエチオピア起源だからルワンダから出て行けと繰り返し返されたことを考えれば (Chrétien dir. [1995], 武内[1995], [1996]), このイデオロギーはヨーロッパ中心主義からツチの外来性を示す「論拠」へと姿を変えながら、今日なお強い影響力をもっている。
- (15) 国家の成立を異民族による征服に求める「征服国家説」において、大湖地域諸国はしばしば典型例として扱われてきた (例えば、ローウィ[1973])。アフリカへの征服国家説の適用に対しては Lewis [1966]が批判を加えているが、大湖地域を征服国家説で理解することへの批判としてはオゴト [1992], Mamdani [1996]などがある。
- (16) グリーンバグによれば、アフリカ大陸内には、ニジェール・コルドファン語族 (Niger-Kordofanian), ナイル・サハラ語族 (Nilo-Saharan), アフロ・アジア語族 (Afro-Asiatic), コイサン語族 (Khoisan) の4語族が認められる。ニジェール・コルドファン語族にはマンデ語群, 大西洋側語群, そして赤道以南の大半の地域で話されるバンツール諸語を含むベヌエ・コンゴ語群などが分類される。ナイル・サハラ語族はサハラ砂漠中央部から東アフリカにかけての諸言語が含まれ、そのシャリ・ナイル語派の東スーダン大語群にナイロートが含まれる。アフロ・アジア語族は、西アジアからアフリカ大陸にかけてみられる言語, すなわちアラビア語, ベルベル語, アムハラ語, ハウサ語などが含まれ, ソマリ語やガラ語など「アフリカの角」地域で話される諸語がクシ語派と呼ばれる。コイサン語族は, 南部アフリカに居住するサン, コイが話す言語である (『文化人類学事典』, 『世界大百科事典』の関係項目による)。
- (17) Oliver [1966]によれば, 紀元前3000～2000年頃, サハラ砂漠南縁のスーダンベルトでソルガム, ミレット, 米 (オリザ・グラベリマ) など穀類生産が始まった。これはアフリカ大陸内部の乾燥地帯における食糧生産の革命であった。アフリカ西部ではその伝播は熱帯雨林に阻まれるが, 東部ではエチオピア高原を経て現ケニア半乾燥地域に伝わった。その地域に居住していたクシ系諸語やナイル・サハ

- ラ系諸語の話者は、ソルガムやミレットの栽培知識をもっていたと考えられる。
- (18) インド洋を経由して東南アジアから根茎類がアフリカにもたらされたのは、紀元前2000年頃とされている(『世界大百科事典』の「インド洋」の項、中尾 [1987 (1966): 27])。
- (19) 例えば、Newbury, C. [1988]や Murdock [1959: 351]の写真参照。
- (20) これは、すでに畜産を取り入れていたバンツウ諸語話者が、害虫対策として意図的に環境に働きかけ、森林を草地に変えたともいえよう(Schoenbrun [1998: 75-76])。
- (21) 以下で述べるように、通常クランと訳されるルワンダの *ubwooko* (pl. *amooko*) は、一般にいわれるようなリネージが拡大したもとは異なる起源と機能をもつと考えられる。したがって本章では、ルワンダの *ubwooko* (pl. *amooko*) の訳語としては、「クラン」と括弧付きで表記する。
- (22) ここで「政治的共同体」(political community) という概念は、基本的には山口 [1989: 11]に整理されているように、「『政治システム』の基底たる『社会』のなかの政治的アイデンティティのレベルと政治意思の表出能力並びに『社会』レベルの権力構造の政治的特質の三つを意味する」と捉えてよい。ただし、今日の政治学で用いられるこの定義が「国民」を指すことが多いのに対して、近代国家成立以前のルワンダを扱う本章ではこの言葉は「クラン」、リネージ、そして王宮を中心とするルワンダ国家をも意味することになる。なお、「政治的共同体」については Chabal [1992]も参照のこと。
- (23) ニャルワンダ語(キニャルワンダ)は、ルワンダ人(バニャルワンダ)の言語である。以下、ニャルワンダ語は王名や地名など固有名詞を除いてイタリック体で示す。
- (24) これとは逆に、同じリネージ内に、ツチ、フツ、トゥワが混在することはない。
- (25) ただし、有名なクランのなかでもTsoobeのようにトーテムをもたないものもある(d'Hertefeldt [1971: 6])。
- (26) ルワンダの「クラン」とは何かという問題はルワンダ史研究の重要な論点の一つであった。ツチ、フツ、トゥワのすべてを包摂するその概念が、それら三つの集団の出自を説明する手がかりになると考えられたからである。詳しくは、d'Hertefeldt [1971]を参照のこと。
- (27) Newbury, D. [1980]も、ルワンダの *ubwooko* をリネージの延長線上に捉えるのではなく、厳密な血縁集団とは質の異なる概念として理解すべきだと主張している。なお、現代ニャルワンダ語で、(ub) *wooko* は人種、エトニー (ethnie)、「クラン」など人間の集団範疇だけでなく、牛やバナナなど動植物の分類概念としての意味を有する。他方、(umu) *ryaango* は、(父系)家族という意味にとどまらず、結社、協同組合、会員制組合、会社などの団体をも意味する (Jacob [1984])。Newbury, D. [1980: 392]が指摘するように、前者は分類に力点が置かれた概念であるのに対して、後者は何らかの排他性を前提とした概念であるといえよう。

- (28) ルワンダの口頭伝承には、多数の「フツ小王国」の征服が記録されている (Vansina [1962: 83-94], Lugan [1997: 77-112])。そのすべての存在を立証するかどうかは別にして、ルワンダ王宮の支配が及ばず、フツのみが居住する領域が近年まで存在したことは事実である。ルワンダ北部や西部には、植民地期によりやく王宮の支配が及んだ地域も多い (Newbury, C. [1988], Nahimana [1993])。
- (29) *inzu* は語義的には、「家」を意味する。d'Hertefelt [1971]は、*umuryaango* を大リネージ (*lignage majeur*)、*inzu* を小リネージ (*lignage mineur*) と訳している。それ以外の社会集団としては、*ubwooko* と *umuryaango* の中間的な規模のものが北部でみられる。それは *ishaanga* と呼ばれるが、d'Hertefelt [1971]はこれをサブクラン (*sous-clan*) と訳している。
- (30) *akazu* という言葉は、先述した小規模血縁集団 *inzu* から派生している。
- (31) 土地保有権をもつリネージを「ウブコンデ」*ubukonde* (pl. *abakonde*) と呼ぶ。人口増加にともなって土地保有権をもたないリネージも現れ、その成員は「ウブコンデ」に貢納などを行い、パトロン・クライアント関係を結ぶことによって土地用益権を得た。このようなりネージを「ウブゲレルワ」*ubugererwa* (pl. *abagererwa*) と呼ぶ (Reyntjens [1985: 487-494])。
- (32) ルワンダ王国成立以前からツチ、フツ間に支配従属関係が存在していたとするカガメ (A. Kagame) らの説は、「クラン」の特質と後述するウブハケとを結びつけてその論拠としていた。すなわち、ルワンダの「クラン」にはツチ、フツ、トゥワが混在するが、これはフツとトゥワがウブハケによってパトロンであるツチの「クラン」に従属的立場で組み込まれたものだ。「クラン」の起源はきわめて古いから、いわば歴史の曙からツチが残る二つの集団を支配してきたのだ、とカガメらは主張した。第3節で述べるように、近年の研究によって「ツチ支配」の根拠としてのウブハケが相対化されるにともなって、この説は妥当性を失った。
- (33) Vansina [1962: 52-56]。ここには「食」(eclipse) としか記述されていないが、「1741, 1763, 1774, 1781, 1792, 1825, 1835年の現象を考慮する必要がある」と述べられており、その発生頻度から日食とみてよいだろう。カガメは1741年をセエンタアビョの即位年と考えたが、ヴァンシナはそれを他の史料から批判し1792年とする説を打ち出した。レニもンクリキインフラもヴァンシナ説を採用している。
- (34) ヴァンシナはムタバアジがそもそもンドウガの王だったかも知れないとの説を提示している (Vansina [1962: 85])。
- (35) 1960年に至ってもギサカ出身者はルワンダ人とみなされていない、とヴァンシナは述べている (Vansina [1962: 83])。
- (36) アビイルについては、Vansina [1962: 27-31], Newbury, C. [1988: 31, 58, 289, fn. 3]などを参照。アビイルは先住民集団の子孫だとする説もある (Schoenbrun [1998: 157])。
- (37) 原語表記は Newbury, C. [1988]による。Vansina [1962: Chapter 4]は必ずしも

ニャルワンダ語表記を示していない。他方、Newbury, C. [1988]は原語を丁寧に表記しているものの、調査対象が王国周縁部なので必ずしも王国中央の統治制度に合致しない部分もある。原語は適宜両者から選択したが、「県」のように原語が不明なものもある。

- (38) 植民地化以前のルワンダでは王と諸チーフとの間に牛を介したパトロン・クライアント関係がみられた。これが後述するウブハケである。軍は基本的に各チーフに所属し、戦闘は各チーフが自らの兵を率いて参加した。王は牛を与えることでチーフの恭順を得たが、これには周辺国で掠奪した牛を分け与える場合、軍事的功績に対する報償として牛を与える場合、征服した地域にチーフを派遣し、牛を含む諸資源の管理権を与える場合など、いくつかのパターンがあったであろう。こうした過程を経て貴重な資源である牛と政治的支配者との関係が深まり、時代が進むにつれ、ルワンダの牛はすべてその地域を治める軍に属し、したがってその軍を指揮するチーフに属し、最終的には王に属するという理念が成立した（ここでは個々人の牛に対する近代的な意味での所有権は成立していない）。また、立派な角をもつなどとくに容姿に優れた牛 (*inyambo* 牛など) を中心に王の牛群が育てられ、それらは信頼の証としてチーフに与えられた。これら王の牛は各チーフの軍によって管理され、「牛一軍」(*armée-bovine*) と呼ばれた (Nkurikiyimfura [1994: 54-64])。
- (39) サブチーフ (*sous-chefs*) は Vansina [1962] の、丘チーフ (*hill chief*) は Newbury, C. [1988] の用語である。県のなかの区分は丘を単位としてなされたのであろう。
- (40) 王都がおかれた丘のサブチーフ (丘チーフ) は、王が直接任命した。この場合、トゥワが任命されることが多かったといわれる。トゥワは「スパイ、王の警察」という役目を果たしたとヴァンシナは述べている (Vansina [1962: 59])。
- (41) ただし、王個人については、ツチ、フツ、トゥワという区分を超えた存在とされている。
- (42) Maquet [1961: 105]. マケのこの著作は、300名のインフォーマントからの聞き取り調査にもとづいて書かれたものだが、インフォーマントは全員がツチであった。したがってここで述べられていることは、植民地末期のツチ・エリートが、フツも土地チーフになる可能性があったと考えていたということである。
- (43) この場合、土地チーフに任命された「ツチでない人々」がフツとしてのアイデンティティーを抱いていたか、あるいはそのアイデンティティーをどれほど重要なものと考えていたのかは不明である。後述するように、自分はツチである、フツであるという自意識が明確になるのは、とりわけ地方においてはかなり後になってからのことである (Newbury, C. [1988: 51-52, fn. 34])。
- (44) 注(31)で述べたように、ウブコンデは土地保有権を有するリネージを指すが、同時にこのような先住リネージによる土地保有システムをも指す用語である。
- (45) Maquet [1961: 129-131] による。ガラグの義務のうち畑での賦役および夜警はフツのガラグのみが負うとされている。

- (46) 例えば, Lemarchand [1970: 99-102]参照。最近, 植民地化される以前のルワンダは現在の国境よりも広い領域を支配しており, 植民地化にともなって領土を分断されたことが昨今のルワンダ, コンゴなどの紛争の遠因になっていると主張されることがある。例えば, 1998年11月の仏語圏サミットにおけるビジムング大統領の発言 (*Jeune Afrique*, No.1978, pp.23-26) や, コンゴ民主共和国紛争をめぐる報道 (1999年2月3日付『読売新聞』記事「コンゴ内戦: 再燃の背景にツチ族冷遇」) などがそれである。その場合, ルワンダ北部とコンゴ民主共和国, ウガンダの隣接地域を念頭においているようだが, それは歴史的事実を曲解した主張である。植民地化以前, この地域にニャルワンダ語を話す人々が居住していたことはおそらく事実であろうが, ルワンダ王宮はこの地域に対して影響力を及ぼせなかった。その意味では, 現在ルワンダ領に含まれている北部地域に対してすら, ルワンダ王宮の実効支配は十分に届いていなかったのである。
- (47) Newbury, C. [1988: 253, fn. 34]。しかし, 植民地期になると, これらの住民のなかで自らをツチだと認識する者が多数現れてくる。
- (48) そもそもウプハケが登場するのも19世紀半ば以降のことだとの主張もある (Vidal [1997: 6])。
- (49) 植民地期以前に牛を介するパトロン・クライアント関係として, ウムヘト (*umuheto*) という制度があった。これは, リネージが軍事力をもったチーフに牛を献上することによってその庇護 (外部からの牛の掠奪に対する防衛) を得るものである。南西部のキニャガにおいては, ウムヘトを結んだリネージはツチとみなされた。ウプハケが個人間の関係であるのに対し, ウムヘトは個人とリネージとの関係である。またウプハケではパトロンからクライアントに牛が渡るのに対し, ウムヘトではそれが逆になる。ウムヘトはウプハケの前身であると考えられている (Newbury, C. [1988: 75-76])。
- (50) 植民地期以前には, フツという自意識をもった対自的集団が存在したとは言い難いが, ここでは煩雑になるためフツと記している。正確には, 「ツチではない人々」あるいは「王宮からフツとみなされた人々」というべきであろう。
- (51) 王国の周縁部ではツチ, フツという意識がそれほど浸透していなかったことを考えれば, そこでは恒常的な通婚関係にあった集団間に後になってツチ, フツの境界線が引かれるという「意図せざる混交」も当然あったであろう。
- (52) 典型的なのは, ルワンダを築いたとされる伝説の王ギハンガ (Gihanga) が, ツチ, フツ, トウワの3名 (3人の息子という場合もある) に仕事を与え, ツチのみがうまくやり遂げたのでその後ルワンダ社会の統治を任せたと, という内容の神話である。これに似た内容の神話はルワンダ各地で収集されている。
- (53) ただし, ツチも上位の者 (主人, チーフ, 王) に対しては貢納義務を負っていたことに変わりはない。
- (54) ルワンダをはじめ, 大湖地域の諸王国には封建制が成立していたとする議論がある。ルワンダの場合, イギキンギ地を恩給地とみなし, そこで賦役, 貢納を行

う人々を農奴とみなせば、そのような主張が可能となる。こうした主張にも一定の根拠があるが、イギキンギ地の展開した時期はそれほど長い期間ではなく（19世紀後半～独立直前まで）、植民地期におけるその展開は明らかに植民地政策が関与していることを考えれば、「伝統的ルワンダ社会」を封建制の名において特徴づけることは無理がある。

- (55) ンクリキインフラはイギキンギ地が誕生した理由として、牛の頭数増大、18～19世紀の開拓、王の意思という3点をあげている（Nkurikiyinfura [1994:88]）。牛の数が増えたことは、農業生産力増大と結びつけて解釈すべきだと考える。王の意思については、事実かも知れないが証明できない。
- (56) Vidal [1997]は、農耕民にせよ牧畜民にせよ、定着生活を開始したのが18世紀のことにすぎないと述べている。
- (57) *Le Monde* 1996年11月12日付、地理学者 Dominique Franche に対するインタビュー記事による。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- オゴト, B. A. (栗本英世訳)[1992]「大湖地方」(D. T. ニアヌ編『ユネスコ アフリカの歴史 第4巻(下)——二世紀から一六世紀までのアフリカ』同朋舎出版, 723～762ページ (原書は1984年出版))。
- 武内進一[1995]「民主化のなかの権力とマスメディア—『ラジオ・ミルコリンヌ』をめぐる—」(アジア経済研究所編『第三世界のマスメディア』明石書店)。
- [1996]「J. P. クレティアン編『ルワンダー虐殺のメディア—』」(『アジア経済』第37巻第11号, 11月) 85～89ページ。
- 中尾佐助[1987(1966)]「栽培植物と農耕の起源」岩波新書。
- フィリップソン, D. W. (河合信和訳)[1987]『アフリカ考古学』学生社(原著は, David W. Phillipson, *African Archaeology*, Cambridge University Press, 1985.)。
- マケ, J. (小田英郎訳)[1973]「アフリカ—その権力と社会—」平凡社(原著は, Jacques Maquet, *Power and Society in Africa*, London: Weidenfeld and Nicolson, 1971.)。
- ローウィ, ロバート・H. [1973]「国家の起源」法政大学出版局(原著は, Robert H. Lowie, *The Origin of the State*, Russell & Russell, 1962 <1927>)。
- 山口定[1989]『政治体制』東京大学出版会。
- 日本語事典類
『文化人類学事典』弘文堂, 1987年。

『世界大百科事典（第2版）』（CD-ROM版）日立デジタル平凡社，1998年。
 日本語定期刊行物
 『読売新聞』

<外国語文献>

- Braeckman, Colette [1994] *Rwanda : Histoire d'un génocide*, Fayard.
- Chabal, Patrick [1992] *Power in Africa : An Essay in Political Interpretation*, London : MacMillan.
- Chrétien, Jean-Pierre [1985] "Hutu et Tutsi au Rwanda et au Burundi," dans Jean-Loup Amselle et Elikia M'bokolo dir., *Au coeur de l'ethnie : ethnies, tribalisme et Etat en Afrique*, Paris : Editions la découverte, pp.129-166.
- [1995] "Un génocide africain : de l'idéologie à la propagande," dans R. Verdier, E. Decaux et J.-P. Chrétien dir., *Rwanda : Un génocide du XX^e siècle*, Paris : L'Harmattan, pp.45-55.
- [1997] *Le défi de l'ethnisme : Rwanda et Burundi : 1990-1996*, Paris : Karthala.
- Chrétien, Jean-Pierre dir. [1995] *Rwanda : les médias du génocide*, Paris : Karthala.
- d'Hertefeldt, Marcel [1962] "Le Rwanda," dans M. d'Hertefeldt et al., *Les anciens royaumes de la zone interlacustre méridionale ; Rwanda, Burundi, Buha*, Tervuren : Musée Royal de l'Afrique Centrale, pp.9-112.
- [1971] *Les clans du Rwanda ancien : Elements d'ethnosociologie et d'ethnohistoire*, Tervuren : Musée Royal de l'Afrique Centrale.
- Dorsey, Learthen [1994] *Historical Dictionary of Rwanda*, Metuchen : Scarecrow Press.
- Feierman, Steven [1995] "Political Culture and Political Economy in Early East Africa," in P. Curtin, S. Feierman, L. Thompson and J. Vansina, *African History : From Earliest Times to Independence*, London : Longman, pp.129-151.
- Guichaoua, André dir. [1995] *Les crises politiques au Burundi et au Rwanda (1993-1994)*, Paris : Karthala (Université de Lille D).
- Hiernaux, Jean [1968] "Bantu Expansion : The Evidence from Physical Anthropology Confronted with Linguistic and Archaeological Evidence," *Journal of African History*, pp.505-515.
- Jacob, Irénée [1984] *Dictionnaire Rwandais - Français*, en 3 volumes, Kigali : Imprimerie Scolaire.
- Kagabo, José et Claudine Vidal [1994] "L'extermination des Rwandais tutsi," *Cahiers d'études africaines*, 136, pp.537-547.
- Kagame, Alexis [1959] *La notion de génération appliquée à la généalogie dynastique et à l'histoire du Rwanda dès X^e-XI^e siècle à nos jours*, Bruxelles.
- Lemarchand, René [1970] *Rwanda and Burundi*, London : Pall Mall Press.
- Lewis, Herbert S. [1966] "The Origins of African Kingdoms," *Journal of African History*,

- pp.402–407.
- Lugan, Bernard [1997] *Histoire du Rwanda de la préhistoire à nos jours*, Courtry : Bartilat.
- Mamdani, Mahmood [1996] “From Conquest to Consent as the Basis of State Formation : Reflections on Rwanda,” *New Left Review*, 216, pp.3–36.
- Marysse, S. et F. Reyntjens dir. [1997] *L’Afrique des Grands Lacs : Annuaire 1996–1997*, Paris : L’Harmattan.
- Maquet, Jacques J. [1961] *The Premise of Inequality in Ruanda : A Study of Political Relations in a Central African Kingdom*, London : Oxford University Press.
- Murdock, George Peter [1959] *Africa : Its Peoples and Their Culture History*, New York : McGraw–Hill.
- Nahimana, Ferdinand [1993] *Le Rwanda : Emergence d’un Etat*, Paris : L’Harmattan.
- Newbury, Catharine [1974] “Deux lignages au Kinyaga,” *Cahiers d’études africaines*, 53, pp. 26–38.
- [1988] *The Cohesion of Oppression : Clientship and Ethnicity in Rwanda, 1860–1960*, New York : Columbia University Press
- Newbury, David [1980] “The Clans of Rwanda : An Historical Hypothesis,” *Africa*, 50(4), pp.389–403.
- [1994] “Trick Cyclists? Recontextualizing Rwandan Dynastic Chronology,” *History in Africa*, Vol.21, pp.191–217.
- Nkunzumwami, Emmanuel [1996] *La tragédie rwandaise : Histoire et perspectives*, Paris : L’Harmattan.
- Nkurikiyimfura, Jean–Népomucène [1989] “La révision d’une chronologie : le cas du royaume du Rwanda,” dans C. –H. Perrot, G. Connin et F. Nahimana dir., *Sources orales de l’histoire de l’Afrique*, Paris.
- [1994] *Le gros bétail et la société rwandaise, évolution historique : dès XII^e – XIV^e siècles à 1958*, Paris : L’Harmattan.
- Oliver, Roland [1966] “The Problem of the Bantu Expansion,” *Journal of African History*, pp.361–376.
- [1977] “The East African interior,” in R. Oliver ed., *The Cambridge History of Africa, Volume 3, from c. 1050 to c. 1600*, Cambridge : Cambridge University Press, pp.621–669.
- Prunier, Gérard [1995] *The Rwanda Crisis : History of a Genocide : 1959–1994*, London : Hurst & Company.
- Reyntjens, Filip [1985] *Pouvoir et droit au Rwanda droit public et évolution politique, 1916 –1973*, Tervuren : Musée Royal de l’Afrique Centrale.
- [1994a] *L’Afrique des Grands Lacs en crise : Rwanda, Brundi : 1988–1994*, Paris : Karthala.

- [1994b] “Akazu, ‘Escadrons de la Mort’ et autres ‘Réseau Zéro’ : Un historique des résistances au changement politique depuis 1990,” dans A. Guichaoua dir., *Les crises politiques au Burundi et au Rwanda (1993–1994)*, Paris : Karthala (Université de Lille I), pp.265–273.
- [1995] *Rwanda : Trois jours qui ont fait basculer l’histoire*, Bruxelles : Institut Africain–CEDAF.
- Rwabukumba, Joseph et Vincent Mudandagizi [1974] “Les formes historiques de la dépendance personnelle dans l’Etat rwandais,” *Cahiers d’études africaines*, 53, pp.6–25.
- Sanders, Edith R. [1969] “The Hamitic Hypothesis : Its origin and functions in time perspective,” *Journal of African History*, pp.521–532
- Schoenbrun, David [1993] “We Are What We Eat : Ancient Agriculture Between the Great Lakes,” *Journal of African History*, pp.1–31.
- [1998] *A Green Place, a Good Place : Agrarian Change, Gender, and Social Identity in the Great Lakes Region to the 15th Century*, Portsmouth : Heinemann.
- Speke, John Hanning [1864] *Journal of the Discovery of the Source of the Nile*, (vol. 1), Edinburgh : Blackwood.
- Sutton, J. E. G. [1993] “The Antecedents of the Interlacustrine Kingdoms,” *Journal of African History*, pp.33–64.
- Vansina, Jan [1962] *L’évolution du royaume rwanda des origines à 1900*, Bruxelles : Académie Royale des Sciences d’Outre-mer.
- [1995a] “New Linguistic Evidence and ‘The Bantu Expansion,’” *Journal of African History*, pp.173–195.
- [1995b] “The Roots of African Cultures,” in P. Curtin and S. Feierman, L. Thompson, J. Vansina, *African History ; From Earliest Times to Independence*, London : Longman, pp.1–28.
- Verdier, Ramond, Emmanuel Decaux et Jean-Pierre Chrétien dir. [1995] *Rwanda : Un génocide du XX^e siècle*, Paris : L’Harmattan.
- Vidal, Claudine [1969] “Le Rwanda des anthropologues ou le fétichisme de la vache,” dans R. Botte, F. Dreyfus, M. Le Pape et C. Vidal, “Les relations personnelles de subordination dans les sociétés interlacustres de l’Afrique centrale,” *Cahiers d’études africaines*, IX, 35, pp.384–401.
- [1974] “Economie de la société féodale rwandaise,” *Cahiers d’études africaines*, XIV, 53, pp.52–74.
- [1995] “Le génocide des Rwandais tutsis : Trois questions d’histoire,” *Afrique contemporaine*, No.174.
- [1997] “Données historiques sur les relations entre Hutu, Tutsi et Twa durant la période précoloniale.” (CD-ROM, Réseau documentaire international sur la région

des Grands Lacs Africains, No.7, juin 1999. (収録)

Willame, Jean-Claude [1995] *Aux sources de l'hécatombe rwandaise*, Bruxelles : Institut Africain-CEDAF.

— [1997] *Banyarwanda et Banyamulenge*, Bruxelles : Institut Africain-CEDAF.

外国語定期刊行物

Le Monde.

Jeune Afrique.